

中庸目次

中庸目次

解題

中庸の篇章

中庸の作者

中庸の名義

性

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

第六章

第七章

第八章

一

二

三

三

七

一一

一三

一三

一四

一四

一五

一六

四一四三三



中庸 目次

第九章 一七

第十章 一七

第十一章 二〇

第十二章 二一

第十三章 二三

第十四章 二七

第十五章 二九

第十六章 三〇

第十七章 三四

第十八章 三六

第十九章 四一

第二十章 四六

第二十一章 六三

第二十二章 六四

中庸 目次

第二十三章 六五

第二十四章 六六

第二十五章 六七

第二十六章 六八

第二十七章 七三

第二十八章 七六

第二十九章 七八

第三十章 八二

第三十一章 八四

第三十二章 八六

第三十三章 八七

中庸目次終

中庸

講師 安井小太郎先生講義
哲學館編輯員筆記

中

中庸のことは大學の解題中にふくめて述べおきたれば重複を避けて今は只その外の中庸に關することのみはん、此の書は大學と同じく禮記中の一篇なりしを漢儒より宗儒に至りて別にとりいだしたるものなれど、古本と比較するに少しも差異なし。

庸

中庸の篇章 朱子は分ちて三十三章とし、更に此を三支に分類し、第一章より第十一章までを第一支とし、その第十一章は子思が傳ふる所の意を述べて言を立てしものにして之を綱とし、第二章より第十一章までは子思が孔子の言を引き、此の章の義を終ふるものにして之を目とせり、第十二章より第二十章までを第二支とし、その第十二章は子思の言にして道は離る可からずといふ首章の意を申ぬ

中

て明かにせしもの、以下の八章は孔子の言を雜へ引きてなほその意を明かにせるなり、第二十一章より第三十三章までを第三支とす、その第二十一章は子思が孔子の天道人道の意を承けて言を立てしもの、以下十二章は子思の言にして反覆その意を説明せるものとせり、

宋の王魯齋は第一章より第二十章までを第一支とし、第二十一章より以下を第二支とし之を誠明章として、誠を説きたる者となせり、なほ魯齋は哀公問政の章を以て、漢儒の雜記の混じたるものにて中庸のものにあらずとせり、

庸

仁齋の中庸發揮には第一章より第十五章までを第一支とし、第十六章より以下を第二支とし、なほ第一章中なる喜怒哀樂之未發謂之中、發而皆中節謂之和、中也者天下之大本也、和也者天下之達道也、致中和、天地位焉、萬物育焉、を樂經の竄入せるものとし、十箇の證を擧げて論じたれど、こは本文を講ずる折に述ぶることとすべし、

中庸の作者

史記にも孔叢子にも中庸の作者は子思なりといへれど、史記の事實に關しては疑を客るべきこと少からず、就中孔叢子の如きは偽作たること明かなるものなれば、子思なりとの説も確證なしといは、いふべし、されど孟子が

中庸を引けるを子思と師弟の關係ありし例より觀れば、子思なりとするも大差なからん、故に余はしばらく此の説に従はん、とす、

中庸の名義

中 庸

鄭玄は中和之用と説きたり、即ち中和は體にして用はそのはたらきと見たるなり、程子は不偏之謂中、不易之謂庸、ととき、庸を以て常なるものとせり、此の説よろし、論說に中庸之爲徳也、其至矣乎といへるも、亦此の義なり、さて中といふとは支那にありては古くより用ゐられたる語にして、殆んど道德の極點となしたるものにて、書經に皇極といひ、論語に堯の言を引きて允執厥中^つといひたるなど、皆此の中の意にして、偏倚せず過不及なきをいへるなり、そも、仁といひ義といふ名目ある以上は多少偏倚する傾向なきにあらず、さればかゝる名目を下さずして、中といふ方優りたらんやうなり、然れどなほいは、中はその時と場所とによりて變更するものにて、必ずしも一定のものに非ず、故に教といふ點よりいへば、仁義等と名づけられたる者完全なるが如し、

性

性といふ文字は中庸の眼目なれば、こゝにその大畧を講じおくべし、孔子は性相近といひし外には、子貢が夫子之言性與天道不可得而聞也といへるが

如く、性に關する説なければ、其の意見をうかがふに由なし、孟子に引ける性の説に三つあり、性無善無不善、性有善有不善、性善有性不善これなり、性無善無不善は告子の説なれど、他の二説は誰のにや、判然せず、告子は性に就いてはその善惡如何を問ふべき者にあらずとし、性有善有不善は性は善惡に關係あれども、性その物の善惡如何は明かならずとし、有性善有性不善は多數の人の中には性の善なるもあり惡なるもありとせるなり、かく孔孟の比にも種々の議論ありしが、孟子に至りて性善説を唱へたるを始めとして、荀子の性惡説、韓退之の三品説、其他性善情惡説など相ついで起り、宋朝に至りては程子兩性説を唱へて、性善性惡二説の折衷を計れり、孟子は人の性本と善なれど放心あるが爲めに惡となるとし、荀子は性惡なれど善を善なりと辨別する智識を有するが爲めに善となるものなりとせり、三品説は餘り細密に過ぎ實際に當りてその何れに屬するかを辨ずること難く、殆んど批評外のものなり、程子の兩性説とは性を分ちて天地の性、形氣の性とせるものにて、天地の性とは各自が天より享け得たる純粹の者にして、形氣の性とは耳目の慾等をいふ者也、されば程子は天地の性のみなるを善といひ、形氣の性の多きを惡といふなり、さりながら既に人と生れたるからには必ず形氣なかるべからざるが故に此の説の成り立つとは難しといふべし、言ひ換ふればその結果は善惡相混ずといふに同じきものとなるなり、以上大略性に關する思想の沿革を述べたるが、余の考ふる所は告子と同じく性は善惡を問ふべきものにあらずとするなり、本と善といひ惡といふは其の行爲の結果について始めて下し得べき名目なれば、その未だ外に發せざるにあたりては、善惡如何を論ずべき者にあらざるなり、

中庸
 子程子曰、不偏之謂中、不易之謂庸、中者天下之正道、庸者天下之定理、此篇乃孔門傳授心法、子思恐其久而差也、故筆於之書、以授孟子、其書始言一理、中散爲萬事、末復合爲一理、放之則彌六合、卷之則退藏於密、其味無窮、皆實學也、善讀者玩索而有得焉、則終身用之、有不能盡者矣、

子程子の義に就ては大學に於て述べたるを以て今復た贅せず、不偏とはカタヨラザルの謂ひなり、不易は變動せざるの謂ひなり、一方に片寄ると云ふとなく、永

中

くの間變りのなきと云ふが中庸なり凡そ一つの行があればそれは誰がまねて行ふても差支なきと譬へば天下の公路の如く誰でも行き得る者ならざるべからず故に中は天下之正道とは云へり又其行ふ所以の理は此處には通る理屈になるが彼處には通らぬとか古は免もあれ今となりてはそんな理屈は通らぬと云ものではならぬ故に庸は天下之定理と云へり此篇は乃孔門傳授心法子思恐其久而差也故筆於之書以授孟子と云ふは他より入ましく云はるゝ所なり免に角程子の考にては此篇にある事柄は孔門派に於ては誠に純粹なる道理として心より心に傳へたる者にて別に書物に書きたるにはあらずしが段々傳流が遠くなれば或は其真面目を失はんやも計り難し故に聖孫子思に至り之を恐れて書物に書き之を門人の孟子に授けたるが此書なりとの意見なり其果して然りしや否やは今得て審かにすべからず其書始言一理とは始めには道德の根源たる天命のことを書きてあるを云ふ中散爲萬事とは中ごろに至り三徳經鬼神等一理より生ずる色々のことを説きてあるを云ふ未復合爲一理とは未に至り何をするにも誠と云ふ者がなければならぬ即ち誠物之終始不誠無物など誠と云ふことを深く述べたるを云ふ然れば始終は理をのべ中に理の應用を述べたるものと見ることを得故之則彌六合とは中庸の道理は何くにも用ひ得られざるなく何くにも存する者即ち天地四方に行き涉りて漠然として取り留めもなきやうに思はるゝが仲々そんな者にはあらず吾人の心中に藏りてあり外に之を尋ねるにも至らぬ者なりとなりされば之を玩味すればする程面白く殆んど窮りなき趣味を感ずる彼の漫に絶對の道とか何んとか徒らに高遠に馳せ空談に流るゝ者とは異なりてをる皆實地の學問であるさればよく之を讀み合點することを得ば一生涯之を用ひても足らぬとか乏しひとか云ふとはない譬へば水脈に掛りたる井戸の何程汲みても涸るゝことなきが如しとなり云はれ此文は中庸の序説の様なものなり

庸

中

庸

天命之謂性。率性之謂道。脩道之謂教。

コレハ甚だ分り難い所なり先づ一應朱子の註にて解かん此三句の下にある朱註は宋儒一般に涉りて奉ずる所の説なり其本はと云へば周茂叔の説なり天命之謂性の性は朱子は中庸の中と同じに見たり而して朱子の性善説の根本は實

中

に此の一句にあり、第一天命とは如何なるものかと云ふに天は陰陽五行を以て萬物を拵へる、其中にて陰氣を多く受けたるは女となり、陽氣を多く受けたるは男となる、陰陽以下は氣であるが、氣と云ふものあれば理が其れに着ひて居る、今陰陽五行よりして萬物が成れりとするれば、矢張り萬物に皆理が着ひてある、人は氣の最も清き處を享けて生じたるものなれば、他の萬物に視ぶるに最も多く理を備へて居る、ソレテ吾人には建順五常の徳を備へて居る、是れ生と共に有する所に於て生して後暫く過ぎて得る所にあらず、譬へば是國に來れる使者は夫々の權能を行ふがソレハ是國に至り始めて權能を有するではなく、其自國を出るとき已に其國主の命令に因て得たるが如し、今吾人が建順五常の徳を有するは猶ホ此くの如し、是れ天より與へられたる命令の如きものである、而て此の建順五常の徳は、生と共に生ずるものなれば、性と稱すべく、其性は即ち理に過ぎざれば最も正しきものなり、換言すれば善なるものである、箇様なるものを吾人は持て居るとするが故に、性は善なりとの斷案を生ず、

次に其賦命の性の發動のマ、ニ行を仕向けてゆくが之を道といふ、此の道を修むるが教である、脩とは朱子は品節と説けり、未だ名教を普ねく布き及ばざぬ時と雖も、孝とか弟とか云ふ大躰の者は民各之を知て居るが、其細目に至ては未だ知る所あらず、細目とは例へば親には朝起きたるときは何をする、膳を進めるには如何様にする、親が病氣の時は如何する、死んだ時は如何様にする、と云ふやうなこととなり、此等を一々條目を定め禮儀に作ることを品節と云ふ、此は聖人は人間は親を大事にする、と云ふ傾きあるに因て制定せるものであるとなり、

庸

中

庸

道也者、不可須臾離也。可離、非道也。是故君子戒慎乎其所、不睹、恐懼乎其所、不聞。

既に上にも述べたる如く、吾人は生れながらにして、健順五常の徳を有し、これが發動のまゝに行ふが即ち道といふものなり、然れば道は暫時の間も人と離るゝと能はざる也、離るゝとの出來得る者ならば、これ性に率ふに非ず、故に君子は人に睹られざる所にて、心常に敬畏を存するを以て、よく戒慎し、人に聞かれざる所にて、敢て忽にする、となく、恐れ慎むなり、不睹、不聞は睹られざる、聞かれざる、と訓むべし、若し睹ず、聞かずと訓むときは、君子が睹聞くやうになりて、意通せず、

莫見乎隱莫顯乎微故君子慎其獨也。

人の耳目を暗まし、隠れて不善をなすとも、己れ之を知るが故に、終には顯はれざる事なし、又細微の事なりとも、幾は則ち動けるが故に、是亦明かに人の認むる所となる也、されば君子は人の知らざる所を戒懼して、道に遠からぬやうにする也、漢の楊伯起が天知る地知るの類なり、

喜怒哀樂之未發謂之中、發而皆中節謂之和、中也者、天下之大本也、和也者、天下之達道也。

喜怒哀樂は如何なる人も皆具へたる情也、この情の未だ發せざる内は、偏倚する所なきを以て、之を中と謂ふ、この情外へ發して過不及なく乖戾する所なく、其の宜しきを得るを和といふ、中は天下の人の心の大本にして、和は天下の人の行ふべき所の大道也、

伊藤仁齋は中庸發揮に此の章を以て、樂經の竄入也とせり、そは未發謂之中の中は中庸の中とは其の意大いに異りて、發して節に中るべきものも、中らざるべき者も、均しくこれ中にして、言ひ換ふれば未發の中は混然として善惡を區別し難

き者となる、然ればこの點に於いては性善説と矛盾して大いに窮するものなれば也、且つ論孟等にある中は皆既發の中にして未發の中を論せられたる事なきを以て、孔門の言にあらずとせり、朱子の説の如くするも、中を分ちて未發、既發の二つとせざる可からず、なるほど孔孟の中を説くや、必ず皆既發の中にして、絶えて行爲に表はれざる中を説きしとなければ、或は仁齋の説の如く、他よりこゝに竄入せし者ならんか、とはいへ理論として評するときは、此の説は宋儒の兩性説、或は性善、性惡の二説よりも、確かに一步を進めたる説と云ふべし、故に予は此一章は他の諸經典に稀見する所の一種の議論なりと信ずるなり、

致中和、天地位焉、萬物育焉。

中と和とを推し極むる時は、天地其の所に安んじ、万物その生を遂ぐ、蓋天地万物本われと一體にして、吾が心中和を得て正順なれば、天地の氣も亦正順にして、万物を育するなり、天地位すとは天は高く地は卑く、七政愆らず四時惑はず、山川澗澗各々その常を得るを云ひ、萬物育すとは少者は長し、老者は終はり、動植飛禽潛魚まで其性に從て生育するを云ふ、是れ道を身に體するの極功を述べ、上文を結

びしなり、

右第一章

仲尼曰、君子中庸、小人反中庸。

是より以下は皆中庸の徳を論じたるものにて、上の未發の中にはあらず、行爲に發して偏せず倚せず過不及なきをいへる也。

仲尼曰はく、唯君子は能く中庸の道を行ふなり、小人は是れに反すと、中庸の書を子思の書きしものとすれば、仲尼の二字いかゞ思はるれど、作者に關するとなれば、茲には言はず、

君子之中庸也、君子而時中、小人之反中庸也、小人而無忌憚也。

元來中は一定の躰ある者にあらず、時に隨ひ所によりて變ずる者也、君子の中庸を得るは、其の徳ありて能く戒懼し、又時と所とによりて中に當るを以てなり、小人の中庸に反する所以の者は、欲を肆にし妄に行ひて、忌み憚る所なきを以てなり、されど小人はこの中庸に反したるものを以て、中庸也と心得るなり、これ中は上にいへる如く定躰なきものなれば、小人は小人の心を以てかく推測するなり、

中

庸

右第二章

子曰、中庸其至矣乎、民鮮能久矣。

孔子曰はく、中庸の徳は實に至極のものにして、過ぐるも及ばざるも皆中庸に非ず、かゝる難事なれば民のこの徳を能くする者の鮮きと已に久しと、鮮は人數の上より、久は時代の上よりいへる也、論語には能字なけれど、これある方をよろしとす、

右第三章

子曰、道之不行也、我知之矣、知者過之、愚者不及也、道之不明也、我知之矣、賢者過之、不肖者不及也。

孔子曰はく、中庸の道の行はれざるは、我之を知れり、知者は多く、知るに過ぎて行ふに足らずとなし、愚者は知るに及ばずして行ふ所以を知らざればなり、又中庸の道の明かならざるも、我よく知れり、賢者は之を行ふと過ぎて、不肖者は及ばざれば也と、或説に行字と明字とは、互に入れかはりし也といへり、この説に従ふ方妥穩なるが如し、

中

庸

人莫不飲食也、鮮能知味也。

かく道の明かならず又行はれざるは、恰も人が食物の眞の味ひを知らぬが如し、飲食せざる人は絶えて無けれど、能くその味を知る者鮮きと同じにて、道は須臾も離る可からず、皆人の由るべきものなれど、多くは過不及の弊ありて、眞の中庸を得る者鮮し。

右 第四章

子曰道其不行矣。

人は知にあらざれば愚賢にあらざれば不肖也、然るに知者及び賢者は之に過ぎ、愚者及び不肖者は及ばざるが故に、到底中庸の道は行はるまじと歎ぜられたるなり、是れ知者は深く隠僻を求め、愚者は昏昧に安んずる爲め、又賢者は好で詭異を爲し、不肖者は卑近に安んずるため、孰れも知と行とに過不及あるべし。

右 第五章

子曰舜其大知也、與、舜好問而好察、邇言、隱惡、而揚善、執其兩端、用其中於民、其斯以爲舜乎。

孔子曰はく、舜は大知の君なるかな、我が知を用ゐずして人の知を用ひ、縦令卑近なる言にも注意して遺すと無し、是れ一見恰も愚なるが如くなれども、大知の大知たる所以は即ち此に存する也、邇言だに猶此の如し、知者の言に聽く所あるは言ふまでも無きとなり、又惡は隠し善は揚げ、過と不及との二端を執りて何れにも偏せず、眞の中を民に施しぬ、かくして其れ舜といへるかほどまでの大聖人になれるものか、と也、凡そ物には皆兩端あり、之を知らずんば到底その中を得る可からず、さればこそ執其兩端といはれたるなれ。

右 第六章

子曰人皆曰予知、驅而納諸罟獲陷阱之中、而莫之知辟也、人皆曰予知、擇乎中庸、而不能期月守也。

予とは世の人が自分をいふ言也、孔子の自稱にあらざ、罟は網、獲は機檻とも、鳥獸を捕ふる具なり、陷阱はおとし穴也、孔子曰はく、世間の人は皆異口同音に予を知者として誇稱すれども、決して知者には非ず、是等の人々は日となく夜となく罟獲陷阱の中に追ひ納れられあるも、之を避くることを知らずとなり、そは利欲の

爲めに心迷ひて禍を受けながらも、之を避くるとを知らざるを言ふ、かゝれば何ぞ知者なりと謂ふ可けんや、又人々我は知者なりと自稱すれど其の實は然らず、中庸の行を擇び得ても、僅に一二箇月も守ると能はざるなりと、自ら知なりとすれば、人に聽くを快しとせざるは必然の理にして、これ既にその知ならざるを證する者也、中庸は明確なる標準なきが故に、之を行ふと極めて困難なりといへども、自ら用ゐると無くしてこれを人に取り、仁義五常の道を蹈みて倦まず進む時は、遂に中庸の道に達し之を行ふとを得るなり、

右 第七章

子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善、則拳拳服膺而弗失之矣。

回は孔子の弟子顔淵の名、拳々は捧げ持つ貌、膺は衣服、膺は胸也、弗は普通なかれと訓めど、こゝは無と通じて用ゐしなり、孔子顔淵を批評して曰はく、回は極端を避けて、中庸を擇び、之をとり行ふなり、回は一つの善事を發見し、身に取り得し上は、恰も物を奉持するが如く、之を心胸に著け、堅くとりて失ふことなく、能く守るなりと、

子曰、天下國家可均也、爵祿可辭也、白刃可蹈也、中庸不可能也。

政治は國民をして各満足を得しむる機關なるが故に、均を以て最大の目的と爲す、孔子曰はく、天下國家を均しうし、各人に満足を與ふるは至難の事なりと雖ども、力行して怠らざれば、之を能くするとを得、爵祿は人の希望する所、之を辭して受けざるは難き事といへ、また爲し得ぬとにも非ず、戰陣に臨み磨きたてたる刃を蹈むは、誰れも恐懼するところ也と雖ども、之を爲すと能はざるにあらず、されば以上の三つの者は難きに似て、其の實易きものなれど、中庸の道に至りては、易きに似て其の實却つて然らず、仁義に精熟して毫も私意を加へざる者ならでは能くしがたしと、中庸の道の難きを言はれたるなり、論語に孔子が可與共學、未可與適道、可與適道、未可與立、可與立、未可與權といへると、其の意相似たり、上列の三者も其實至難の事なれ共、中庸の難きを云はんが爲に此く云はれたり、

右第九章

○ 子路問強。子曰、南方之強與、北方之強與、抑而強與。

子路は性質勇を好む人物なりしかば、孔子に強とは如何なるものなりやと問ひ

たるに孔子はその間の意をたづねて曰はく、汝は單に強とのみ言へど、強にも種あり、南方にていふ強か、北方にていふ強か、それとも汝のいふ強か、抑はソモソモと訓む、こゝは、あるひは、またはなどの義なり、而は汝也、

中

寛柔以教、不報無道、南方之強也。君子居之。

心寛かに氣柔く、人の及ばざる所を教誨し、他より横逆無道の目にあふとも、之を堪へ忍びて返報せざるは、南方にていふ強にて、君子の身をおく處なり、

衽金革、死而不厭、北方之強也。而強者居之。

衽は刃物、革は甲冑也、干戈の類を席となすとはあるまじきとにて、金はたゞつけ字にて、意味なし、衽は席也、衽金革とは戰地に在りて露宿するをいふなり、かく艱難を忍び、死するも厭はざるは、北方にていふ強にて、汝の如き強者はこの強に身を置くなり、前の一節は南方の強を説き、此の一節は北方の強を説けるなり、支那は國境廣大なるが故に、自ら國民の氣風一定せず、南方は温順なるを以て、消極的の強を尙び、北方は剛強なるを以て、積極的の強を尙べるなり、これまでは南北の強を論ぜられたるものなるが、以下中庸の道に説き及ぼせるなり、

庸

故君子、和而不流、強哉矯、中立而不倚、強哉矯、國有道、不變塞焉、強哉矯、國無道、至死不變、強哉矯。

故に君子は人と打ちとけても、決して人の惡に流移すること無し、これ即ち強なり、中立して一方に偏倚せず、これ亦強也、塞は古注に猶實也と解けり、志の充實せるを謂ふ、國に道の行はるゝ時は、その信實に保てるもの即ち道德を變せず、これ亦強也、國に道の行はれざる時は、假令身は死すとも、その守る所の道を變せず、是れ亦強也、然れば形骸の困苦を堪へ忍びたればとて、之を以て直ちに強なりとは謂ふ可からずと諭されし也、中庸の作者、此の一節に中庸の道を論ぜられたるを以て、こゝに採り收めしならん、朱子は塞未達也と解きて、國に道あれば、爵祿を得て立身すとも、尙困厄の時の節操を變せずとやうに説きたり、塞といふ文字の解釋の上よりいへば、此の説甚だ巧なれど、猶いかにやと打ちかたぶかるゝ心地すれば、暫く古注に従ひて、塞を以て道となす説をとらんとす、されど新古兩注所詮は大なる異同無き也、矯は猛強の貌なり、

中

庸

右第十章

。子曰素隱行怪後世有述焉吾弗爲之矣。

素字は漢書の藝文志に素に作れるより、朱子は素は誤也として曰はく、深求隱僻之理而過爲詭異之行也と説きたれど、古注は文字通りに解して、素は慄に通ずればとて、隱にむかふとやうに訓みたり、此の説によれば、身を隱匿すといふ方に心をさしむけて、怪異を行ふととなる也、これは全く新注の方可なり、深く人に知られざる理を考へ求めて、世に外れ情に背きたる行を爲せば、後世之を稱述して、一つの學派ともなる可けれど、吾れは先王の道を遵奉して、其の中を得んとする者なれば、かゝる行爲はなさずと也、朱注の如く老莊佛者などは、専ら形而上の學にのみ心を潜め、力を用ゐるが故に、自然極端にはしる行爲もある也、聖人君子は中庸の道を尊ぶを以てこれらの學説行爲を攻撃せるなり、

。君子遵道而行。半途而廢吾弗能已矣。

君子は、世人が認めて以て道とせる所にそひ違ひて行くなり、中途にして力足らず、目的の處まで達すると能はざるやも計られぬと、吾れは止むと能はざるなり、君子、依乎中庸、遯世不見、知而不悔、唯聖者能之。

中

君子は、上にいへる隱を求め、怪を行ふなどのとは、少しも爲さず、中庸の道に依りて事を行ふ、若し此の道行はれざれば、世を遯れて、人に知られざるも悔いず、これ至難の業にして、唯聖人のみ之を能くす、常人は人我を知らざれば、怨み悔ゆるが常なれど、聖人に至りては、中庸の成徳を得たる故に、能く此くの如くなる也、此の一章は、盡く中庸の徳を説かれしものなり、

右第十一章

。君子之道費而隱。

古注は此の一節を前章につけて、唯聖者能之君子之道費而隱となし、費字は費すればと訓めり、又唐時代の異本には費を拂に作れり、鄭玄は、費猶僉と解きて、君子はその道行はるれば、朝廷に仕ふれど、もしその道の損するときは、直ちに世を遯れて隠るとやうに説けり、朱子は此の一節を上のと引きはなして、別節とせり、余はこの説に従ふなり、さて朱子は費は用之廣也、隱は體之微也と解きて、君子の道は其の用廣く、何物にても寓せざると無けれど、其の本體は微にして、見る可からずと、躰と用との二つに解説せり、この解釋は使用の途大なれば、従つて費すと

庸

いふより、かく用之廣とせる者なれど、かくの如き解釋を下せる例の有りや無しや、少しく妥穩ならぬやうに思はるれど、姑くこの説に従はんとす。

○夫婦之愚、可以與知焉。及其至也、雖聖人亦有所不知焉。夫婦之不肖、可以能行焉。及其至也、雖聖人亦有所不能焉。天地之大也、人猶有所憾。故君子語大、天下莫能載焉。語小、天下莫能破焉。

道は廣く天下に行はるゝものなれば、匹夫匹婦の鄙賤の人にて、學問才智なしとて、も之を知るとを得、されど道の躰は微なるものなれば、其の極まる所に至りては、聖人と雖ども、知らざる所あり、匹夫匹婦の愚なるも道を行ふとを得れど、其の高大なるに至りては、聖人と雖ども能くすること能はざる也。以上は上の費而隱を承けて之を解説せるなり、凡そ天地程大なるもの外に無けれど、人によりては猶之を遺憾とする者あり、故に君子道の大小なる所を語れば、此の廣漠たる天地も載すること能はざる程なれど、其の一端の小なる所を語れば、誰にも知れ易く、又行ふことも易ければ、天下能く破ること無し、君子の道は所謂其大無外、其小無内ものなり、既に内無ければ、從ひて能く破ること莫き也、破は分割の意なり、

庸

中

○詩云、鳶飛戾天、魚躍于淵、言其上下察也。

戾は至也、察は著也、詩の大雅旱麓の篇に、鳶は高く飛びて天に至り、魚は深く潜りて淵に躍ると云へる辭あり、是れ道の天地の間に流行し、上下著しく昭かなるを言へるなり、

○君子之道、造端乎夫婦、及其至也、察乎天地。

君子の道は先づ其の端を夫婦になし、其の極まれるに及びては、聖人も知らず能くせざる程天地に明かなり、夫婦といへるは其の本源に溯りて言へるものにて、夫婦ありて始めて親子兄弟あるものなれば也、此の一節は道の大小即ち兩極端を擧げて上文を結び、以て中庸の道を知らしめんとせるなり、

右第十二章。子思之言。蓋以申明首章道不可離之意也。

其下八章雜引孔子之言。以明之。

○子曰、道不遠人、人之爲道而遠人、不可以爲道。

本章は始めに忠恕を述べ、終りに中庸の徳に言ひ落せるなり、忠恕は之れを總括していへば、我が心を本として人を思ひやるをいふなり、忠とは誠は是の心あり

中

庸

中

て而して自ら欺かざること、恕とは己を待つ心の心を推して、以て人に及ぼすものなれば、忠恕を主とすれば、勢ひ其心正しからざるを得ず、故に自ら中庸の徳に合ふなり、孔子曰はく、道は即ち人の道にして性に率ふのみ、人外に道無く、道外に人無し、固より何人も之れを知り、之れを行ふことを得るものなり、然るに若し孟子の道在邇而求諸遠といひけん如く、此の道を以て卑近行ふに足らずと爲し、務めて高深行ひ難きを道と爲し、隱を索め、怪を行ひ、人事を離れたるは、是れ所謂外道にして、以て道となすへからず、我が謂ふ道は人身の上在りて、常に日用の間に昭著せるものなり、人之爲道とは爲人之道と同じ、之字を用ひて句を倒にしたるなり、古文に其例多し、

詩云伐柯伐柯其則不遠執柯以伐柯睨而視之猶以爲遠故君子以人治人改而止。

此の一節は詩を引きて、道の人に遠からざるを證したるなり、詩は豳風伐柯の篇にて、周公の東に居りし時、東人平日之れを見んことを欲したるに、公を見ることが得るの易かりしを喜びて、此の詩を作れるなり、柯は斧の柄なり、則は法なり、睨

中

は目を邪にして視るなり、詩に云ふ、斧の柄を爲らんとして、柯を執りて木を伐れば、彼の柯の大小長短の法則となるべきものは、我が手に執れる柯に存すと、詩の句は此に盡く、作者の觀察能く微に入り細を穿ち、妙味いふ可からざるものあり、以下は孔子詩の意を註釋せるものにて、斷章取義なり、柯を執りて以て柯を伐るは、詩人は近きに喩ふれど、猶其間に邪視して以て彼れと此れとを較ぶべき距離あり、故に猶ほ以て遠しと爲す、道と人とは然らず、人即ち道なれば、彼此の別無し、故に君子は其の人自ら有する所の道を以て、還つて其の人の身を治む、其の人能く改めて人たる所以に復れば、即ち止む、新註も古註も猶以爲遠を柯を伐る者之れを視て遠しと爲す義に解したるは非なり、

忠恕違道不遠施諸己而不願亦勿施於人。

違は去なり、施諸己の施は施されてと訓ずべし、忠恕は道と相去ること遠からず、道本人に遠からず、但人私意の爲めに隔てられ、己れあるを知りて、人有るを知らず、故に人に施す所の者多くは其の當を得ず、惟だ忠に本づき恕を以て行はば、其の施す所の者、道を去ること何ぞ遠からんや、然れば、己れ施されて願はしからざ

ることは、人も亦願はざらんと、己れを以て物に及ぼし、之れを人に施すこと勿れ、
 君子道四。丘未能一焉。所求乎子以事父未能也。所求乎臣以事君未能也。所求乎弟以事兄未能也。所求乎朋友先施之未能也。庸德之行庸言之謹。有所不足不敢不勉。有餘不敢盡。言顧行行顧言。君子胡不慥慥爾。

中

庸

求は猶ほ責のごとし、言ふは、子に向ひて責め望む所を以て父に事へ、臣に向ひて責め望む所を以て君に事へ、弟に向ひて責め望む所を以て兄に事へ、朋友に向ひて責め望む所を以て先づ朋友に施す、此の四者は君子の道なり、丘未だ一をも能くせざるなりと、是れ自ら有せざるの意、以下は中庸の徳をいふ、庸は平常なり、慥々爾は篤實にして謹直なる貌、言ふは、庸徳として何人にも常とせられ行ひ得べき徳を行ひ、庸言として誰れにても言はるべき言をも謹み、其の實を踐み、其の可を擇び、以て過無からんことを期す、徳行足らざる所有れば敢て勉めて足ることを求めずんばあらず、言語は餘ありて易ければ、言ふ可きことも亦盡く言はず、言語は實行に稱はんとを要め、實行は言語に稱はんとを期し、互に相顧應して其の一致を謀る、君子の言行此くの如し、虚浮に馳騁すること無し、豈に慥々として篤實ならざらんやとなり、

右第十三章

中

○君子素其位而行、不願乎其外。
 本章は命を樂むことをいへるなり、即ち君子の安心立命を説けるなり、素は朱註にては猶見在也と解き、古註は素讀爲儻と解けり、儻は向なり、何れに従ふも大差無し、言ふは、君子は其の位地に向ひて爲すべき所を爲し、其の位地より外に出でたるを願ひ慕ふの念なし、

○素富貴行乎富貴、素貧賤行乎貧賤、素夷狄行乎夷狄、素患難行乎患難、君子無入而不自得焉。

庸

自得は從容順適の貌なり、君子の行は其の位に依ると前にいへるが如し、例へば現在の地位富貴なれば、則ち之れに相當して富貴らしき行を爲し、貧賤なれば、則ち貧賤を行ひ、夷狄に處しては夷狄を行ひ、患難に處しては患難を行ふ、さりどて苟も免れて夷狄に従ふと謂ふには非ず、故に君子は其の入る所の境に隨ひて、何

處に在るも、從容として分に安んじ命を樂むなり、

在上位不陵下、在下位不援上、正己而不求於人、則無怨。上不怨天、下不尤人。

中

陵は陵虐なり、援は攀援なり、君子は其の外を願はざる故、上位に在りて貴く勢あるも、賤しくして位卑き者を陵を虐げず、又下位の卑しきに在るも、上位の人に攀り頼むこと無し、夫れ己れを正しうして人に求めざれば、則ち怨恨無し、蓋怨恨なるものは、多くは人に求めて得られざるより生ずるものなればなり、君子は怨恨無きを以て、上は天を怨みず、下は人を尤めず、其の外を願ふと無し、

故君子居易以俟命、小人行險以徼倖。

庸

故に君子は平易なる位地に居り、富貴に素しては則ち富貴の當さに行ふべき所を行ひ、貧賤に素しては則ち貧賤の當さに行ふべき道を行ひ、患難夷狄にも皆此の如く、窮通得喪一に之れを天命に聽き、之れが爲めに經營勞苦すること無し、是れ上に所謂素其位而行、不願乎其外者なり、徼は求なり、幸は得べからざるを得るをいふ、即ち僥倖なり、小人は私智を聘せて危険の道に行き、以て當さに得べからざる幸福を求む、正に君子の易に居て命を俟つと相反す、

子曰射有似乎君子、失諸正鵠、反求諸其身。

中

正は布にかくる的、鵠は皮におく的なり、賓射には布侯を張りて正を設け、大射には皮侯を張りて鵠を設くるなり、孔子曰はく、射は君子の心掛に似たる所あり、何となれば、射て正鵠を失して中らざれば、則ち諸れを其の身に反求して、我か技藝の巧みならざるが爲めなりとす、射者の心を立つること此の如し、この其の身に反求すといふが君子の心掛に似たる所なり、故に君子は人を怨みず、天を怨みず、位に素して行ひ、其の外を願はざるなり、

右第十四章

君子之道辟如行遠、必自邇、辟如登高、必自卑。

庸

辟は譬と同じ、君子の道は譬へば遠き路に行くに必ず近きより始むるが如し、近きを舍つれば遠きを致すこと無し、又譬へば高き所に登るに必ず卑きより始むるが如し、卑きを舍つれば高きを致すこと無し、道の進爲の秩序あること此の如し、

詩曰、妻子好合、如鼓瑟琴、兄弟既翕、和樂且耽、宜爾室家、樂爾妻孥、子
曰、父母其順矣乎。

中庸

詩は小雅棠棣の篇なり、鼓瑟琴とは其の室家の和せるを言ふなり、翕は合なり、耽は詩に湛に作る、樂むなり、孥は子孫なり、此の詩は周公の作る所にして、兄弟に燕するの樂歌なり、此の一節は詩を引きて、妻子兄弟の邇きより、他の遠き者に樂みを及ばすとを明かにせるなり、言ふは、棠棣の篇第七章に曰はく、妻子好く和合して、琴瑟の和するが如く、兄弟も亦和合して其の樂みを久しうすと、又其第八章に曰はく、既に翕へば則ち爾の室家に宜しく、好し合へば則ち能く爾の妻孥を樂ましむと、棠棣の詩には父母の事を言はず、故に孔子此の言を加へて、以て高卑遠邇の意を明かにす、孔子曰はく、人能く妻子に和し、兄弟に宜しきこと此くの如くなれば、父母も其れ之れに安んじ樂みて、順ならざること無からんと。

右第十五章

子曰、鬼神之爲、德、其盛矣乎。

中庸

本章は鬼神を假りて、以て道の離る可からざるをいふ、本章の鬼神は只假り來れるものに過ぎず、然れど序なれば、之れが説明を爲しおかん、孔子の鬼神に對する考は、其の形體の有無も、其の性質の何如をも言はずして、人間界より引き離して論ぜられたるなり、そは論語の講義中に述べおきたれば、其の條を参照すべし、茲には他の人々の説を略述せんに、古くは鬼神を以て後世の如き理想的のものと爲さず、一つの形體あるものと考へしなり、稍下りては鬼神は人間とは關係なき別種のものとし、人間は宜しく之れを尊敬すべしとなせり、春秋以後左氏傳の作られし頃には、人間の思慮想念を以て鬼神とせり、天道常無し、善に與すなどいふ言は、此の考より出でたるなり、程子は鬼神天地之功用、而造化之迹也といひ、張子は鬼神者二氣之良能也といふ、二子の説は其の實鬼神無しといふ説に近きが如し、程子の説の如くば、悪人の榮え、善人の衰ふるも皆天地の功用活動にして、造化の神の行爲が顯はれたるものなりと謂はざるを得ず、鬼神之爲德、其盛矣乎の意に反對す、因つて張子は陰陽二氣の道理に合へる所能を以て鬼神なりと爲せるなり、朱子は以二氣言、則鬼者陰之靈也、神者陽之靈也、以一氣言、則至而伸者爲神、反而歸者爲鬼、其實一物而已、といへり、約言すれば鬼神は理なりといふに外ならず、

此の如く鬼神に對する思想に二三の沿革あり、又諸説多けれど、本章を解釋するには鬼神を以て人間以上の能力ありて、意思感情等を具へ、自由に人間に禍福を降すものと説くを可とす。

中

孔子曰はく、鬼神の徳たる、其れ盛なるかな、百衆之れを畏れ、万民之れに服す、

視^シ之^レ而弗見^ス、聽^ク之^レ而弗聞^ス、體^ニ物^ニ而不可遺^ス。

鬼神は視んとすれども其の形見えず、聽かんとすれども其の聲聞えず、然も萬物の中に體して之れが幹本となり、物能く闕遺すること無し、物に體して遺さざるは、是れ鬼神の盛なるなり、之れを視れども見えず云々は乃ち鬼神の鬼神たる所なり、古註は體猶生也、可猶所也、不有所遺、言萬物無不以鬼神之氣生也と解き、又一説には、體とは之れを躬にして離れざるの謂なり、鬼神は此に在るか、彼に在るか、を知らず、凡そ宗廟有る所の物に體して、諸れを斯に在る可からずと謂ひて、遺す能はざる者なり、故に其の宗器を陳ぬ、其の裝衣を設け、以て齋敬を盡すなりともいへど、今は姑く朱註に従ふ。

庸

使^シ天下^ノ之人^ヲ齊^シ明^ニ盛^ニ服^シ、以^テ承^テ祭^ス、祀^ニ洋洋^乎、如^シ在其^ノ上^ニ、如^シ在其^ノ左右^ニ。

明は猶潔のごとし、洋々乎は流動充滿の貌なり、言ふは鬼神の徳盛にして、物に體して遺す所なし、故に天下の人敢て侮慢する者無く、自ら齋戒明潔して、以て肉を肅み、衣服冠履の屬を變し、畏敬以て祭祀に奉承せしめ、其の威徳の洋々乎たるは、人の頭上に在るが如く、左右に在るがごとしとなり。

中

詩曰、神之格思、不可度思、矧可射思。

詩は大雅抑の篇なり、格は至なり、矧は况なり、射は詩には數に作る、厭なり、思は皆語辭なり、詩に曰はく、神の來至するや、憶度すべからず、之れに事ふるに敬を極むべきのみ、况んや厭怠して敬せざるべけんやと。

夫微之顯、誠之不可揜、如此夫。

以上鬼神の盛なるを説きたりしが、此に至りて終に誠に歸せるなり、こゝの誠は眞實無妄の謂なり、言ふは、鬼神の見えず聞えずして、其の徳の盛なることは前に云へるが如く、甚だ微にして、以て顯なり、誠の掩ふ可からざるも亦是の如しとなり。

庸

右第十六章

子曰舜其大孝也與德爲聖人尊爲天子富有四海之內宗廟饗之子孫保之。

(三十四)

中庸
庸

本章より第十九章に至るまでは皆孝を論じたるなり、こゝに孝といふは父母の意に順ひ、其の奉養を厚くするの謂に非ずして、繼述を以て孝の大なるものと爲せるなり、抑も人の生命には限ありて、長きも百歳に出づるは無し、而して此の限ある生命を永遠に持續せんことを欲するは普通の人情なり、さればこそ佛者は死後の苦樂を唱へて安心立命の地を與へんとはするなれ、中庸は之れと異りて、子たる者親の業を繼述すれば、其の滅するは唯肉體のみにして、其の事蹟は永く世に遺りて、無限の生命を保つと同じ結果を生じ、些の憾みも無かるべしと、安心の地を子孫の大孝の上に置きたるなり、舜は孝の最も盛大なるものを爲したるかな、何を以て言ふかとならば、舜は生知安行、徳は聖人たり、尊きことは天子たり、富は四海の内を有てり、實に圓滿なる位を得たりと謂ふべし、且つ上は宗廟其の祀を享け、下は子孫其の事業を保ちて諸侯たることを失はず、以て孝を竭すを得たり、是れ舜の大孝なる所以なり、子孫と

は陳國を謂ふ、

故大德必得其位、必得其祿、必得其名、必得其壽。

中庸
中

故に大徳ある者は必ず其の位を得、必ず其の祿を得、必ず其の名を得、必ず其の壽を得るなり、位祿名壽の四者は皆人の欲する所、而して舜は聖人の大徳を有し、貴きと天子と爲りて其の位を得、富、四海を有ちて其の祿を得、民稱頌して其の名を得、年は百歳にして其の壽を得たり、舜の年に百歳と百十歳との説あり、予は百歳説に従ふ、

故天之生物必因其材而篤焉。故栽者培之、傾者覆之。

材は質なり、篤は厚なり、栽は植なり、故に天の萬物を生ずるや、精粗尊卑の別あり、精にして、尊き者は、必ず其の材質に因りて之れを加厚す、故に植物の栽するものは根深く、蒂固ければ、則ち天以て之れに培ひ、若し傾きて危きものは、則ち天以て之れを覆す、天の物を生ずる此の如し、今舜の大徳を以て、祿位名壽を得るは、是れ上天其の材に因りて篤うするの意なり、

詩曰嘉樂君子、憲憲令德、宜民宜人、受祿于天、保佑命之、自天申之。

(三五)

故大德者必受命

詩は大雅假樂の篇なり、詩經に假に作れるは非なり、此れに依りて嘉に作るべし、憲々は詩に依りて顯々に作るべし、保佑は俱に助くる義なり、申は重ねるなり、詩に曰はく、稱美すべく愛樂すべきの君子、顯々として誰が目にも明かなる美德あり、百姓に宜しく、百官に宜し、此れを以て祿を天に受く、天は此の君子を佑け、佐けて命を下し、再三之れに重ねて已ますと、舜の大德にして、祿位名壽を得しは、即ち君子祿を天に受くるの意にして、即ち上文篤くすることなり、

右第十七章

子曰無憂者其惟文王乎。以王季爲父。以武王爲子。父作之子述之。

此れは文王の事を言ふ、孔子曰はく、古來幾多の聖天子中些の憂患する所無き者は其れ惟文王か、堯舜の如きは朱均を以て子と爲し、舜禹の如きは瞽瞍を以て父と爲せり、未だ憂無き能はざるなり、然るに文王は王季を以て父と爲し、武王を以

て子と爲す前に承くる所あり、後に繼ぐ所あり、實に圓滿缺くるなきの聖人と謂ふべし、さて二つの之字に就きて種々の議論あれど、予は殷を亡ぼすの事業を指して言へるならんと思ふなり、そは詩の魯頌閟宮の篇に后稷之孫、實維大王、居岐之陽、實始翦商、至于文武、續大王之緒、致天之屆とあり、是れに由りて之れを觀れば、大王即ち王季の父が殷を亡ぼさんとするの望みを懷き、武王の時に至りて其の望を果したるものと言はざる可からず、然るに孟子は大王を以て聖人の如く稱賛して、詩の言ふ所と相反せり、詩の云ふ所に從へば、戎殷の擧は大王より基おせし事となる、是に於て詩の翦字を助くる義となし、或は福する義と説き、又は勳むる義と説き、以て回護を試みる説あれども、翦は當然切るとか斷つとか解すべき文字なれば、寧商を斷ち切る志ありと見る方可ならんか、或は孟子の説を主張する者もあらんが、孟子の中には多少此の他にも誤謬とおぼしき點もあれば、敢て之れに拘るべきにあらず、以上述ぶるが如く、周は少くとも三四代以前より殷を亡ぼさんとする志ありきとすれば、この之字は殷を亡ぼすとにて、先づ父の王季より始めて文王之れを承け、子の武王之れを繼述して、漸く多年の宿望を果し

たるものといふべし。

武王纘太王王季文王之緒、壹戎衣而有天下、身不失天下之顯名、尊爲天子、富有四海之內、宗廟饗之、子孫保之。

纘は繼なり、緒は事業なり、戎衣は武裝なり、甲冑の屬をいふ、鄭玄は壹戎衣を壹戎般となせり、武王は始めに兵を孟津に出し、次に殷を亡ぼしたるなれば、拘りて言ふときは、壹戎衣とはいふ可きにあらざれども、鄭玄の説も亦一家言たるに過ぎず、此れは前の子述之を承けて、武王の事を云ふ、武王大王王季文王の事業を繼ぎ、一たび戎衣を著けて以て商を伐ち、四海皆武王に歸す、武王原と顯名あり、今臣を以つて君を伐つ、天下皆其の天に順ひ、人に應じたるの舉を諒とす、故に猶其の聲價を減せず、天下の顯名を失はず、尊きと天子たり、富は四海の内を有ち、后稷より文王に至るまでの宗廟に祀られたる人々は、皆王禮を享け、成康以下の子孫之れを保ちたり、其の之れを述ぶること此の如く大なり、

武王末受命、周公成文武之德、追王大王王季、上祀先公、以天子之禮、斯禮也、達乎諸侯大夫及士庶人、父爲大夫、子爲士、葬以大夫、祭以士。

父爲士、子爲大夫、葬以士、祭以大夫、期之喪、達乎大夫、三年之喪、達乎天子、父母之喪、無貴賤一也。

此れは周公の事を言ふ、末字方孝孺は之れを未と解きたり、是れ武王に弑逆の汚名を蒙らしめざらんが爲めに立てたる説にして、武大は紂を亡ぼしたるも、自ら天子の位に即かんとせず、武庚祿父を周の都に封じて、已れはこれが監督者たる位置に立ちたるなり、故に若し祿父にして紂の過を改めんか、下りて之に臣事せんとするの志なりき、武王崩じ、周公旦政を攝するに及び、武庚祿父の暴逆益甚しく、殷の三監亦之れに背きたり、是に於て始めて之れを討ちて周の天子となれるなりといふ、此の説非なり、末は晩年なり、武王晩年命を受けて天子となり、後數年を経て崩じたり、或は云ふ、武王壽九十三、命を受くる時八十有六なりと、文王王業の基礎を建て、武王之れを繼ぎ、周公に至りて文武の志意を成し、王者の號を以て大王王季を追稱し、上先公を祀るに天子の禮を以てせり、先公とは組紺、后稷十二世の孫、乃ち大王の父なり、以上后稷、舜の臣、名は棄、命せられて稷と爲り、民に百穀を播種することを教ふ、始めて郟に封ぜられ、諸侯と爲りて、其の國に居たり、故に

中

后稷と曰ふ、是れ周の始祖なり、に至るまでをいふ、斯禮也以下は上の注脚なり、孝道に關係なし、天子に非ざる先公を祀るに天子の禮を以てせし理由は、總て祭祀は子の心を達するにあれば、其の子の身分に應じて祭るなり、故に周公天子の禮を以て祀り、下にしては諸侯と大夫と士庶人とに達し、皆分に緣りて以て自ら盡すことを得せしむ、如し父大夫にして、子士たれば、父没する時葬るには則ち大夫の禮を以てし、祭るには則ち士の禮を以てす、如し父士にして、子大夫たれば、父没する時葬るには則ち士の禮を以てし、祭るには大夫の禮を以てす、二者皆賤するに非ず、僭するにも非ず、蓋、葬の死者に従ふは、死者をして其分を安ずることを得せしむるなり、祭の生者に従ふは、前述の如く、生者をして其の情を伸ぶることを得せしむるなり、是れ天下の通禮なり、期は一年なり、又喪服の制あり、喪の禮は身分によりて、降と絶とあり、降とは喪服の年限を縮殺することにして、絶とは全く喪服を廢絶するなり、さて、期の喪は諸父昆弟の爲めにするなり、庶人より大夫に達して皆之れを爲す、大夫は降すと雖も絶つこと無し、天子諸侯は期年以下の喪服を服せず、三年の喪は適孫が祖の爲めにし、及び父が長子の爲めにし、妻の爲め

庸

中

にするなり、天子此の喪服を降すことはありと雖も絶つこと無し、庶人より天子に達して皆通行す、父母の喪は天子より庶人に至るまで、上下服を同じうす、貴賤と無く一なり、天子諸侯か期年以下の喪に服せざるは、朝を廢するより自ら政道の亂れ易きを恐れてなり、以上皆周公の武王の業を繼ぎ、以て文王の事を述ふる所以の者なり、

右第十八章

子曰。武王周公其達孝乎。

達孝とは天下古今に通して、何人も異議を容れざる孝をいふ、孔子曰はく、武王周公は其れ達孝なるかな、二聖の孝は止、一身の孝たらず、其の祖考の徳業を成し、喪祭の禮を制し、以て上は先公に及ぼしたるを云ふ、

夫孝者善繼人之志善述人之事也。

此れ武王か大王王季文王の緒を續ぎ、周公か文武の徳を成せるを承けて言ふなり、兩つの人字は先人を指す、夫れ武王周公の所謂達孝なるは何そや、凡そ先人爲さんと欲するの志ありて、而かも未だ能く爲さざる所のものを、子孫繼ぎて之れ

を成し、先人已に成す事あるも、未だ能く盛ならざる所のものを、子孫述へて之れを弘むれば、孝焉れより大なるは莫し、武王周公は志を繼ぎ、事を述ふるの大なる者なり、是れ二聖の達孝たる所以なり、

春秋修其祖廟、陳其宗器、設其裳衣、薦其時食。

此の節は繼述の事を言ふ、其は親を指す、修は掃洒整飭するなり、祖廟は太祖の廟にて、后稷を主として、群公俱に在るなり、祖廟は禮記の王制に、天子七廟、三昭三穆、與大祖之廟而七、諸侯五廟、二昭二穆、與大祖之廟而五、大夫三廟、一昭一穆、與大祖之廟而三、士一廟、庶人祭於寢とあり、宗器とは先世藏する所の重器なり、周にては書經顧命の篇に見えたる赤刀、大訓、弘璧、琬琰、大玉、夷玉、天球、河圖の類をいふ、裳衣は先祖の遺せる衣服なり、時食は四時によりて定れる食なり、言ふは、其の志を繼ぎ、事を述ふるや、祭祀の禮を大なりとなす、毎歲春秋二季、其の祖廟を掃除し、國の大寶、先祖の遺せる器を守藏より出して之れを陳ね、又先祖の遺せる衣服を出して、之れを尸に授く、是れ神をして依らしめ、以て生時に象りて、吾か存すか如き誠を致さん爲めなるへし、又四時の食、各、其の物あり、春は羔豚を用ゐ、秋は犢臠を用ゐ

庸

中

て、之れを薦むるなり、

宗廟之禮、所以序昭穆也。序爵、所以辨貴賤也。序事、所以辨賢也。旅酬下爲上、所以逮賤也。燕毛、所以序齒也。

以下宗廟の禮を述べ、孝にて之れを收結す、昭穆は朱註は有事於太廟、則子姓兄弟、羣昭羣穆、咸在、而不失其倫焉と解きて、生者の昭穆と爲せども、余は死者の昭穆を序すとす、説に従ふなり、宗廟の序次は、太祖の廟東に向ひ、其の左を昭と爲し、右を穆と爲す、而して昭は南面し、穆は北面す、父昭たれば、則ち子穆たり、父穆たれば、則ち子昭たり、如し兄弟俱に位に、即けば同じ廟に入るゝなり、例へば、文王昭たれば、則ち武王は穆たり、武王穆たれば、則ち成王昭たり、成王昭たれば、則ち康王穆たり、此の如く宗廟の禮は昭穆を序づる所以也、爵は公侯卿大夫の品秩なり、宗廟に於て事を爲す者を序するに爵を以てして、其等級を別つは、貴賤を辨ずる所以なり、序事の事は、祭に關する職事にして、祝が神に告ぐるの詞を掌る類をいふ、各、職事を執り行ふは、其の人の賢なるを辨ずる所以なり、下爲上は、下、上と爲ると訓ずるを可とす、旅は衆なり、酬は獻酬の酬なり、射禮昏禮などの重大なる禮には、其の重

中

庸

立ちたる人は主人と三たび獻酬を終りて堂下に在る關係者の最も末席なるものより順次に解を其の長に擧げ、堂上最貴の者に至りて止る、此く下なる者の上と爲りて解をあぐるは、是れ其の惠みを賤者に及ぼすの義なり、下爲上を、下上の爲めにすと訓じて、上の爲めに爵を洗ひ、更に酌みて解を擧げ、以て其の長に歸すと説くものあれど、非なり、古註の謂若、特牲饋食之禮、賓弟子兄弟之子、各擧解於其長也と説く方穩かなりとす、燕毛は祭畢りて燕するとき、毛髮の色を以て長幼を別ち、坐の序次となすなり、齒は年數なり、即ち毛髮の純白なる者上席を占め、尤も年齢の若く毛髮の黒き者末席に坐するなり、以上宗廟の禮の重なるものを説けるなり、

踐其位、行其禮、奏其樂、敬其所尊、愛其所親、事死如事生、事亡如事存、孝之至也。

此の一節亦宗廟祭祀の禮を述べたるものにて、皆志を繼ぎ、事を述ぶるの意なり、踐は猶履のごとし、其字は悉く先王を指す、宗廟祭祀のときには、自ら祖先の位を履み、祖先の平生用るし禮を行ひ、祖先の奏せし樂を奏し、祖先の尊びし所の者を

中

庸

尊敬し、祖先の親みし所の者を愛す、死せる者に事ふること、生ける者に事ふるが如く、亡き者に事ふること、存せる者に事ふるが如くするは孝の至なり、事死如事生云々は上の踐其位云々を概括して断定せる語也、死といひ亡といひ、生といひ存といふも、唯文飾を施したるに過ぎずして、其の意は異なる所無し、然れど若し嚴密にいへば、事死如事生とは喪に居る時のことにして、事亡如事存とは葬祭の時のことなり、

郊社之禮、所以事上帝也。宗廟之禮、所以祀乎其先也。明乎郊社之禮、禘嘗之義、治國其如示諸掌乎。

郊社之禮云々は前節に宗廟の禮を説きたるに因みて、郊社の禮を説きたるなり、郊は天子のなす祭にして、天帝を祭る、社は土地の神を祭るをいふ、此の二つの祭は上帝后土に事ふる儀式なり、こゝに所以事上帝也とのみ言ひて、后土を言はざるは文を省きたるなり、宗廟の禮は其の祖先を祀る所以なり、禘は天子五年又は三年に一度宗廟の大祭を爲すを云ふ、但し時祭にも禘と云ふ名あり、嘗は秋の祭なり、禮記の王制に曰ふ、天子諸侯宗廟の祭、春を禘と曰ひ、夏を禘と曰ひ、秋を嘗と

中

庸

三年一度大祭
禘嘗

曰ひ、冬を烝と曰ふと、此れは蓋夏殷の祭の名にして、こゝにいふ禘は本文と異り、周には之れを改めて、春を祠と曰ひ、夏を禘と曰へり、秋冬は夏殷の代と同じ、かく四時皆祭るものなるを、こゝには惟其の一を擧げたるなり、さて上帝に事ふるは敬にして、祖先を祀るは孝なり、故に郊社の禮と、歸嘗の義理とを明かにすれば、敬と孝とも亦従つて明かなるに至り、國を治むること、甚だ明かにして且つ易く、掌を視るが如し、如示諸掌は古註新註其説を異にせり、古註は示讀如、實諸河干之實、實置也、物而在掌中、易爲知力者也といひ、新註は示與視同、視諸掌言、易見也といひ、意義に於てさしたる差も無ければ、何れに従ふも可なり、

右第十九章

○哀公問政。子曰文武之政、布在方策。其人存則其政舉、其人亡則其政息。

以下哀公問の章なり中庸を分ちて二篇とする者は、此れより以下を下篇とするなり、或は此一章を以て竄入なりとなす説もあり、二篇に分つは人々の考によるとにて、敢て妨げなしとするも、中庸に非ず、竄入となすは非なり、哀公は魯の君、名

は蔣、定公の子なり、方は木にて造れる板の如きもの、策は竹にて造れる籒の如きものにて、巻きて以て收むへし、古へは紙なかりしを以て、木や竹に書きて、後世に傳へしなり、聘禮に束帛加書、百名以上書於策、不及百名書於方とあり、策は藏むるに便利なれば、文辭の長きものは、多く之れに書きしと見ゆ、魯の哀公、政を孔子に問ふ、孔子對へて、いはく、政は文王武王より備はれるは無し、而して文武の政は、布き列ねて方策の書に在り、以て考ふ可し、然れども政は文字の上に存するものに非ずして、實地に行ふべきものなり、其の之れを實地に施すに至りては、必ず聖賢に俟つ所無かるべがらす、文武の政を議せる方策は、今に傳はれども、現時文武の政なし、是れ文武の如き聖人有らざるが故なり、政と政を爲す者とは此くの如き密邇せる關係ありて、少しも相離る可からず、故に其人存すれば則ち其の政行はれ、其の人亡すれば則ち其の政息む、公にして文武の政を爲さんと欲せば、宜しく公自ら文武たる可し、公にして文武の行ひし所を行ふに非ずんば、方策に載する所も徒法たるに過ぎざるなり、息は消滅のことし、

人道、敏政、地道、敏樹、夫政也者、蒲盧也。

敏は新註には速也と解き、古註には猶勉也と解きたり、予は古註に従ふ、蒲盧も二
 説あり、新註は沈括以爲蒲葦是也といひて、草の名とせり、蒲も葦も成長し易き草
 なれば、文武の心を以て政を爲せば、民の治まること易やたるに喩へたりとなす、
 古註は蟲の名とせり、曰はく蒲盧、蜾蠃謂土蜂也、詩曰、螟蛉有子、蜾蠃負之、螟蛉、桑蟲
 也、蒲盧取桑蟲之子、去而變化之、以成己子、政之於百姓、若蒲盧之於桑蟲、然と、予は此
 説に従ふなり、蓋古註の方、其人存則其政舉、其人亡則其政息の義に適切なるを以
 てなり、言ふは、人の道は政を勉め、之れを以て最も大切なるものと爲す、地の道は
 草木を殖樹するを勉め、之れを以て最も大切なるとなす、人の政無きは地に草
 木無きが若し、既に政を勉むるを以て人道なりとせば、其の政次第にては、他國の
 民を我が國の民となすとも得べく、民俗を化して善に導くことも亦心の儘なる
 へし、故に政は蒲盧の桑蟲を化して己れの子と爲すか如きものなりと、

故爲政在人、取人以身、脩身以道、脩道以仁。

爲政在人は家語には爲政在於得人に作る、人は賢臣を謂ふ、身は君の身を指して
 いふ、上文に陳ふるが如くなるを以て、政を爲すには書物などはともあれ、賢臣を

親親也

仁者人也、親親爲大、義者宜也、尊賢爲大、親親之殺、尊賢之等、禮所生也。

仁者人也は同音を假りて平易に解釋せるものにて、人の人たる所以は仁あるを
 以てなり、仁有りて後之れに命じて人と曰ふ、然らざれば則ち人に非ず、宜は事理
 を分別して、各宜しき所あるなり、禮は斯の二者を節文するものなり、等は階級な
 り、さて上に脩道以仁といひしが、其の仁とは如何なるものかといふに、人の行は

中

ざる可からざる道にして、親を親しむを以て大なりと爲す、義は事の宜しきなり、賢を尊ぶを以て大なりと爲す、同じく親族といふと雖も、其の中には尊屬卑屬の階級あり、之れに對する尊敬の度も亦従ひて多少の斟酌無かるべからず、例へば二等親に對するときは、一等親に對するときに比して少しく殺ぐ所あり、賢を尊ぶ上に於ても亦等級あり、是れ禮の生ずる所なり、殺も階級なり、

在下位不獲乎上、民不可得而治矣。

此の句は下に在り、誤つて此に重出せしものなれば、解は省く、

故君子不可以不脩身。思脩身不可以不事親。思事親不可以不知人。思知人不可以不知天。

政を爲すは人に在り、人を取るには身を以てす、故に君子は宜しく先づ其の身を脩むべし、身を脩むるに道を以てす、故に身を脩めんと思はし、宜しく親に事へて其の道を行ふべし、親に事へんと思はし、以て人を知らざる可からず、人とは猶人類といはん程の義なり、即ち人が天より賦與せられし徳は何如なる物乎、如何にすれば人たる者の本分を完うし得べき乎、など熟ら考へ見るべし、人を知らんに

庸

中

は以て天を知らざる可らず、蓋天は萬民を生々し、之れが爲めに人君をして、支配せしむる者なれば、天意を知り得なば、君たる者の本分も自ら知り得られ、又人を知るとも得らるゝなり、さて、こゝの人を新註も古註も賢者と見たれど、恐らくは非ならん、前段に於て人を見るときを述べて、又もやこゝに之れを説くは、序次の亂れたるやう思はる、且つ又此の説に従ふときは、天を知れば人を知り得といふ理も明かならず、故に予は下節の知斯三者、則知所以脩身、知所以脩身、則知所以治人、知所以治人、則知所以治天下國家矣とあるが、此の節の意を繰返していへるものとし、以上の如く人字を廣義に説きたるなり、

天下達道五、所以行之者三。曰君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之交也。五者、天下之達道也。知仁勇三者、天下之達德也。所以行之者一也。

達道とは古今を通じて常に行はれ、天下皆之れに由る路なり、即ち書に謂ふ所の五典にして、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信ある、是れなり、言ふは、天下の達道五あり、此の達道を行ふ所以の者三あり、五とは何ぞや、君臣也、

庸

父子也、夫婦也、昆弟也、朋友の交也、此の五つの者は人の大倫にして、古今と無く、上下と無く、共に由る所の達道なり、三とは何ぞや、知仁勇是れなり、智は以て此の道を知るべく、仁は以て之れを行ふべく、勇は以て之れを勉む可し、此の三の者は天下に通達して、何人も非難する能はざる所なり、故に之れを達徳と謂ふ、此くの如く達道を行ふ本となるは達徳なるが、道と徳と之れを行ふ所以の者は乃ち一の誠に在るなり、若し一の誠あらざれば、則ち人欲之れを問て、徳其の徳に非ず、従つて道を行ふと能はず、

或生而知之、或學而知之、或困而知之、及其知之、一也。或安而行之、或利而行之、或勉強而行之、及其成功、一也。

道を知り、道を行ふに、三の差等あり、或は生れながら之れを知るあり、或は學びて之れを知り、或は困みて之れを知る、此くの如く道を知るに蚤莫の差あれども、其の之れを知りし以上は皆終に一なり、或は力を着くるを待たず、安んじて道を行ふあり、或は道を行はざる時は、世に立つこと能はずなどいふ己れの都合より、其の利を知りて之れを行ふあり、或は勉力矯強して之れを行ふあり、行を以て言ふ

子曰、好學近乎知、力行近乎仁、知恥近乎勇。

も亦難易の差あれど、其の道を行ひ功を成すに及びては一なり、之れを總括して言へば、生知安行も學知利行も困知勉行も其の結果に至りては則ち一なり、

此の一節は知仁勇に近きものを説けるなり、孔子曰はく、學問の必要なることを知りて之れを好むは知に近く、是非共爲さざる可からずと、己れの身を苦めて力行するは仁に近く、恥を知りて人より辱められぬやう心掛くるは勇に近しと、前節に於て、知仁勇は天下の達徳なりといひしが、唯知仁勇とのみにては、其の範圍廣きに過ぎて明かならざらんとを思ひ、こゝに殆んど其の地に至る者を擧げて之れを説明せるなり、

知、斯三者、則知所以修身、知所以修身、則知所以治人、知所以治人、則知所以治天下國家矣。

以上の三つを知れば、則ち身を修むる所以は己れの徳を修むるにありて、諸れを他に求むるに非ざるを知る、身を修むる所以を知れば、則ち人を治むる所以も亦己れが身を修むるに在るを知る、人を治むる所以を知れば、則ち天下國家を治む

る所以を知る、天下の達道五以下、身を修むることを言ひ、此の一節にて結べるなり。

中

凡^レ爲^ル天下^ノ國家^ヲ有^ル九^ノ經^ヲ曰^ク修身^也、尊^ル賢^也、親^ル親^也、敬^ル大臣^也、體^ル群^臣也、子^ト庶^民也、來^ル百^工也、柔^ル遠^人也、懷^ル諸^侯也。

前數節に於て、天下の達道五、天下の達德三あり、之れを行ふ所以の者は一なるをいひ、達道達德の説明を終へたりしが、未だ一なる者の説明なし、此に之れを論ずべきなれど、先づ天下國家を治むる九經を述べ、さて後、誠に論及せんとするなり、經は朱註に常也とあれど、こゝにては縦糸の義に解きて、必要缺くべからざるものと爲すが可なり、體は身を以て其の地に處き、其の心を察するなり、子は父母の其の子を愛するが如くするなり、言ふは、天下國家を爲むるに九の缺くべからざる要件あり、其の目を云へば、身を修むるなり、賢人を尊ぶなり、大臣を敬するなり、群臣は我が身體と同じやうに取扱ひて、之を恤むなり、庶民を子の如く愛するなり、百工は國用の資する所なれば、之れを招きて來すなり、遠方より來れる賓旅は、之れに接するに威猛を以てせずして、寛柔を以てするなり、諸侯は常に我れに懷

庸

けて心を離れしめざるなり、天下國家の本は身に在り、故に修身を以て九經の始とせるなり。

修身則道立、尊賢則不惑、親親則諸父昆弟不怨、敬大臣則不眩、體群臣則士之報禮重、子庶民則百姓勸、來百工則財用足、柔遠人則四方歸之、懷諸侯則天下畏之。

此れは九經の效を言ふなり、身を修むれば則ち道立つ、道立つとは道己れに成りて民の表と爲る可きを謂ふ、元來道は身を修むると否とに係はらず存在する者なれど、そは空のとなにて確立せるものとは謂ふべからず、賢者を尊びて其の謀に隨ふときは、則ち惑ふと無し、其の親戚を親めば、則ち諸父昆弟怨みず、諸父は伯叔父の列に在るもの、昆弟は兄弟なり、古の政治には親戚の關係の影響する所大なるものあれば九經中に加へしなり、眩は迷なり、大臣を敬して之れに信任すると専らなれば、則ち事に臨みて迷ふこと無し、君、臣を使ふに禮を以てし、股肱心膂と爲せば、臣其の恩誼に感じ、君に事ふるに忠を以てし、報禮する所重し、庶民を子の如く愛すれば、民の上に親むこと亦父母に親むが如く、之れが爲めに勞すと雖も

庸

中

中

怨みず、百工を招ぎ來たせば、則ち國中の用度自ら充足す、遠人を柔すれば、則ち游士商旅の徒皆其の途に出でんとを願ひ、四方之れに歸せざる莫し、諸侯を懷くれば、則ち徳の施す所の者廣く、威の制する所の者遠く、中國の臣民仰ぎ服せざる者無ければ、四隅海表畏れざる無し、

既、鏡、又、
齊、明、盛、服、非、禮、不、動、所、以、修、身、也、去、讒、遠、色、賤、貨、而、貴、徳、所、以、勸、賢、也、
尊、其、位、重、其、祿、同、其、好、惡、所、以、勸、親、親、也、官、盛、任、使、所、以、勸、大、臣、也、忠、
信、重、祿、所、以、勸、士、也、時、使、薄、斂、所、以、勸、百、姓、也、日、省、月、試、既、稟、稱、事、所、
以、勸、百、工、也、送、往、迎、來、嘉、善、而、矜、不、能、所、以、柔、遠、人、也、繼、絶、世、舉、廢、國、
治、亂、持、危、朝、聘、以、時、厚、往、而、薄、來、所、以、懷、諸、侯、也、

庸

此れは九經の方法を言へるなり、齊敬明潔して其の衣冠を正し、儼然として威儀を整へ、視聽言動禮に非ざれば苟もせず、此れ身を修むる所以なり、讒を去り、女色を遠ざけ、貨財を賤みて、徳を貴ぶは、此れ賢者を勸めて其の朝に立たんとを願はしむる所以なり、其の諸父昆弟等の位を尊うして、之れを貴び、其の祿を重くして、之れを富まし、其の好惡する所を同じうするは、是れ親を親しむとを勸めて、之れ

往、賜、物、
未、リ、貢、

中

庸

をして怨みざらしむる所以なり、官盛は官を盛にしてといふ意なり、人目にも羨ましく思ふほど官を盛にし、之れを信任して用ゐるは、此れ大臣を勸むる所以なり、君臣を待つと忠信にして、祿を重くして養ふと厚ければ、其の徳に感じて益、忠を效すべし、此れ士を勸むる所以なり、民に力役の税を課するに、農時を奪うて之を使役すると無く、又其の賦斂を薄くするは、此れ百姓を勸むるなり、既は讀みて、餼といふ、餼稟は扶持米などいはんほどの義なれど、別ちていへば、肉食を餼といひ、糧食を稟といふなり、百工の作爲する所を日々に省み、月々に試み、周禮の稟人職に、其の弓弩を考へ、以て其の食を上下すと曰へる如く、其の巧拙勤惰によりて扶持を異にし、餼稟其の事に稱ふやうにするは、此れ百工を勸むる所以なり、遠人の吾が國を出で、往く者には節を授けて、之れを送り、來る者は其の蓄積を豊かにして、之れを迎へ、賓旅の善なる者は之れを嘉みし、其の不能を矜み、全きを求め備るを責めざるは、此れ遠人を柔する所以なり、矜は論語の講義中にも述べたる如く、ほこると訓ずる文字にて、憫むと訓ずべきに非ず、本文矜に作れるは誤にして、宜しく矜に改むべし、矜と矜とは字形の類似せるを以て、疾くより混同せられ、

今は矜字は字書にも見えざれど、一はほこると訓じ、一はあはれむと訓じて、全く異なる文字なれば、混同せざるやう注意すべし。世系の絶えたるを繼ぎ、廢滅せる國を擧げ、亂れたる邦を治めて亡びざらしめ、危き邦を持し支へて亂れざらしめ、諸侯の朝聘は時ありて、比年に一たび小聘し、三年に一たび大聘し、五年に一たび朝すといふやうにし、其の往くには賜物を厚うし、諸侯の來りて納貢するを薄うするは、此れ諸侯を懐くる所以なり。朝は諸侯の天子に見ゆるを謂ひ、聘は諸侯が大

夫をして來り獻せしむるを謂ふ。

凡爲天下國家有九經所以行之者一也。

一とは誠を謂ふ、以上述ぶるが如く、天下國家を爲むるに九經あれど、其の根本に溯れば、其の事異りと雖も、之れを行ふに二致なし、要は惟一の誠に歸するなり。

凡事豫則立、不豫則廢。言前定則不跲、事前定則不困、行前定則不疚、道前定則不窮。

此れは達道達德九經の屬を總括して言ふ、豫は豫め備ふるなり、立は成るの意なり、跲は躓くなり、疚は病なり、苦み骨折るを謂ふ、凡そ事其の始を慎み、其の終を念

ひて、豫め之れに備ふれば、其の事成立し、豫め備へざれば、其の事廢す、言ふ所あらんとするや、其の本末を思ひて、豫め定むるときは、言語の上に躓きて進退谷まるが如きこと無く、事豫め定めて、始終を慮れば、困窮すると無し、行ふ所も其の主義目的を前定すれば、苦み骨折ると無し、爲す所の道前定すれば亦困窮すると無し、言前定則不跲以下は、上なる事豫則立の注脚なり。

在下位不獲乎上、民不可得而治矣。獲乎上有道、不信乎朋友、不獲乎上矣。信乎朋友有道、不順乎親、不信乎朋友矣。順乎親有道、反諸身不誠、不順乎親矣。誠身有道、不明乎善、不誠乎身矣。

人の目的は自ら其の行を善くし、餘力を以て人の行を正すに在り、是れ儒教の本分に於て、先づ我が身を善くして後、人に及ぼし、衆と與に道を樂む、故に士の學ぶ者も亦民を治むるを以て志と爲す、然れど如何に天下を治むる徳ありとも、國家を経綸する才ありとも、下位に在りて上に用ゐられざれば、民を治めんと欲するも得べからず、上に獲らるゝに道即ち手段あり、そは朋友に信ぜらるるに在り、朋友に信ぜられざれば、嘉譽上に聞えず、従つて上に用ゐらるゝと無し、朋友に信ぜ

らるゝに道あり、そは親に順なるに在り、父母に孝順ならざれば、朋友に信ぜられず、親に順なるに道あり、そは諸れを身に反して誠なるに在り、事己れに反求して誠ならざれば、父母に順ならず、自ら家庭の圓満を缺く、身に反して誠なるに道あり、そは善を明かにするに在り、善を明かにし、之れを好むと好色を好むが如く、習性と成るにあらずんば、自ら欺むこと有りて身に誠ならず、さて、誠は朱子が眞實無妄と註せる如く、廣義に於ては悪人の惡を爲すも其の間一も自ら欺くこと無ければ、是れ亦誠たるを失はざるなり、大學に所謂誠其意者、毋自欺也、如惡惡臭、如好好色と曰ひ、小人間居爲不善、無所不至、見君子而後厭然、揜其不善、而著其善、人之視己、如見其肺肝、然則何益矣、此謂誠於中、形於外と曰へる、誠は善は善とし、惡は惡として、矯むる所なき眞面目の心を指して云へるものにて、必ずしも善に限るに非ざることば、該講義中に述べおきたり、中庸にいふ誠はかゝる廣義の誠にあらず、誠身有道、不明乎善、不誠乎身矣の句に就きて見るも、其の善に限ると明かなり、即ち中庸にいふ誠は善と相一致するものなり、下章の誠は少しく異なれり、

○誠者、天之道也、誠之者、人之道也、誠者、不勉而中、不思而得、從容中道、

聖人也。誠之者、擇善而固執之者也。

此れ上文の誠身を承けて言へど、この誠者の誠は、誠身の誠と少しく異なる所あり、誠者は誠ある者と訓ずべし、誠ある人と云ふ事なり、外界の刺撃にもよらず、學問の力をも假らず、生れつきのまゝにて善を行ふ立派なる人をいふ、此くの如きは是れ天の道を承け繼ぎたる人なり、又生れつきはさまで立派にはあらざれど、學問其の他の力に依りて、誠ある者と同じくならんと勉めてなすは、此れ人爲にして即ち人の道なり、誠ある者は、勉強を待たずして道に中り、熟慮せずして道を得、かく從容として道に中るは聖人なり、人爲を以て之れを誠にする者は、善惡の區別を明かにし、善を擇ひて、固く之れを執持するなり

博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之。

此れ人爲によりて聖人たらしむるに要する目を擧げたるなり、博く學ひて善道を求め、切に問うて之れを審かにし、慎んで之れを思慮し、明かに可否を辨じ、篤實敦厚之れを行ふ、學問、思辨、行の五者は、以て善を擇ひて固く之れを執る所にして、即ち之れを誠にするの法なり、五者其の一を廢すれば、聖人の域に達する能は

有弗學、學之弗能、弗措也。有弗問、問之弗知、弗措也。有弗思、思之弗得、弗措也。有弗辨、辨之弗明、弗措也。有弗行、行之弗篤、弗措也。人一能之、己百之。人十能之、己千之。

有弗學は不學則己と云ふが如し、有不戰、戰必勝矣といふと同じ句法なり、以下之れに準じて知るべし、君子學ばざれば則ち止む、苟も之れを學べば、力を極めて其の能くせんとを求む、若し一の能くせざる有れば、則ち亦己まず、之れを問へば必ず反覆實正して、其の知るとを求む、之を思へば、必ず融會貫通するを求む、之れを辨ずれば、必ず幾微を剖解して、其の明かならんとを求む、之れを行へば、必熱心にして懈弛無く、其の篤からんとを求む、此の措かざるの心あり、人一たひして之れを能くすれば、己れ之れを百たひし、人十たひして之れを能くすれば、己れ千たひし、必ず其の成るに至つて己む。

果能此道矣、雖愚必明、雖柔必強。

人材の利鈍同じからずと雖も、若し果して此の道を能くすれば、其の性愚昧なる

者と雖も必ず明かなるべく、其の性柔弱なる者と雖も、必ず強なる可し、かく人の道を致して聖人の域に達すれば、生知安行の者と歸を同じうするなり、

右第二十章

自誠明謂之性、自明誠謂之教、誠則明矣、明則誠矣。

本章は前章に續きて、天然を以て誠と説きたるなり、誠の本體を論じたるにあらざ、朱子は此の一節を前章より引き離して別章と爲せど、前章に續けて見る方分かり易し、

自は由なり、生れつき徳を具へたるより、學問朋友の力を假らず、切磋の勞無くとも、即ち誠なるなり、上達して事理に通達し、明照さざる無き者を性のまゝなる人と謂ふ、この性は、孟子の盡心下篇に堯舜性者也とある性と同じ意にて、性の本體を説明せしにあらざ、善惡を區別し得る徳性をもちて、惡を去り、善に就き、かくして漸次上達するは、之れを教學によりて進む人と謂ふ、以上亦教の説明に非ず、誠之者人之道の意なり、誠にして善徳を具へたる者は、自ら明かなるに至り、明かなれば則ち以て誠なるに至る、故に性のまゝなる人も、學ひて知る人も、其の結果

誠性中
以教功

に於ては同一なり。

右第二十一章、子思承上章夫子天道人道之意而立言也、

自此以下十二章、皆子思之言、以反覆推明此章之意、

唯天下至誠爲能盡其性、能盡其性、則能盡人之性、能盡人之性、則能盡物之性、能盡物之性、則可以贊天地之化育、可以贊天地之化育、則可以與天地參矣。

天と地とを參とす
參は己の如きを
三といふ

中

庸

此れは誠を説明したるものにて、至誠其のものを評したるなり、前章の生れつきのまゝをいへると異り、誠とは一點の虚偽なく有の儘に爲すを謂ふ、俗語の真正直といふに同じ、直情徑行は戎狄の教なりといふ語もありて、惟、正直なるのみにては未だ以て可とするに足らざれど、道德の根本は此の誠を外にしては立つと能はず、されば多少の弊ありとするも、至誠が道德の根本たることは論無きなり、言ふは、獨天下唯一の正直者にして始めて能く天の我れに賦與せる性を盡し行ふことを得、其の他の人に至りては、其の性だけのとを行ふ能はず、人にして其の性を盡すべきは、延いて他人の性をも盡すべし、例へば君となりては臣の性をも

知り、父となりては子の性をも明らめ得るなり、能く他人の性を盡すほどの至誠あれば、能く物の性をも盡くすことを得、極端の例をいへば、人の性を盡すときは、山林を治むるとも、牧畜のとも、何に限らず、爲し得るなり、此くの如く己れの性を盡し、人の性を盡し、物の性を盡せば、則ち以て天地の化育を賛けて、其の及ばざる所を補ふべし、賛は猶助くといはんがごとし、以て天地の化育を助く可くば、則ち以て天地と吾れと並び立ちて三と爲るべし、參は並ぶ意と見るも可なり、以上至誠を美せるなり、

右第二十二章

其次致曲、曲能有誠、誠則形、形則著、著則明、明則動、動則變、變則化、唯天下至誠爲能化。

庸

中

致は致し盡すなり、曲は一偏なり、即ち一部分なり、形は中に積んで外に發する也、著は又顯を加ふるなり、明は又光輝發越の盛なるを謂ふ、至誠とまでゆかぬ、其次の人は、其の一部分を推し盡す、其の一部分を盡せば、則ち誠あり、誠あれば、則ち形はるゝものあり、形はるれば、則ち著し、著しければ、則ち明かなり、明かなれば、則

ち人を動かかし、感化せしむるを得、以下動かす力の巧妙なるを形容す、猶上の有誠を形容して、形といひ、著と云ひ、明と云へるがごとし、人を動かせば則ち物従つて變ず、變ずれば渾然として化す、唯天下至誠のみ能く化するを爲す、偽の心を以て物を化する者は未だ嘗て之れ有らず、聖人より下れる人も、其の曲を盡し、積みて能く化するに至れば、其の至誠の妙亦聖人に異ならず、此れも亦誠の功驗を述べたるなり、

右第二十三章

至誠之道、可以前知。國家將興、必有禎祥。國家將亡、必有妖孽。見乎蓍龜、動乎四體。禍福將至、善必先知之、不善必先知之。故至誠如神。

禎祥は福の兆なり、鳳皇鳴き、圖書出づるの類是れなり、妖孽は山崩れ、川竭き、蝗蝻(苗を食ひて災を爲す蟲)生ずるの類是れなり、說文に云ふ、衣服歌謠草木の性、之れを妖と謂ひ、禽獸虫蝗の性、之れを孽と謂ふと、著は筮する所以、龜は卜する所以也、四體は人の容貌、舉動を謂ふ、子貢が邾魯の君を相せしが如き是れなり、(此の事左傳定公十五年に詳なり)前章に述べしが如く、至誠は天地と並ぶことも、人を化す

物の性

蓍
龜
ト
ト

ることも爲し得るが、至誠の道を有てる人は亦以て禍福吉凶を前知するを得、夫れ國家の將に興らんとするや、必ず禎祥の時に先だちて出づるあり、國家の將に亡びんとするや、必ず妖孽の變に先だちて作るあり、或は著龜に見はれて吉凶あり、或は威儀動作の間に見はれて得失あり、至誠の道を有てる人は能く清明にして一毫の私偽無ければ、禍福の將に至らんとするや、善(即ち福)も不善(即ち禍)も皆事に先だちて之れを知る、彼の慈母の孩兒を養育するに、孩兒物言はねども能く其の意を察するが如きも至誠の存するあればなり、此の故に至誠の道を有てる人の、幾を察し、微を顯かにするは鬼神の如し、此れも亦至誠を贊せるなり、

右第二十四章

誠者自成也。而道自道也。

自道の道は導と全じ、生れつき完全なる徳を具へて誠ある者は、他の力を假らずして自ら成すなり、誠之にして道を行ふ者は、自ら道の方に其の身を引きつくさるなり、
佐、自ら成すなり、誠之にして道を行ふ者は、自ら道の方に其の身を引きつくさるなり、

誠者物之終始。不誠無物。是故君子誠之爲貴。

物は事の意なり、何にもあれ一事を成さんとするには、誠の心無かるべからず、山を築くが如き小事にても誠なければ功を一簣に缺くに非ずや、天下の事、小は一身一家より大は國家に至るまで、誠ありて始めて成るなり、故に誠者物之終始にして、誠あらざれば事無し、是れを以て君子は之れを誠にするを貴しとするなり、誠者非自成己而已也。所以成物也。成己仁也。成物知也。性之德也。合内外之道也。故時措之宜也。

誠は自ら己れを成就せしむるのみならず、又以て物を成就する所以なり、人を教育するにも誠を以てすれば、其の教化の及ぶ所廣くして、能く教育の目的を成就すべし、己れを成すは仁、物を成すは知なり、故に誠は性の徳にして、己れ(即ち内なり)と、人(即ち外なり)とを合はする道にて、何れの時に用ゐても宜しき道なり、以上は誠を種々の方面より見て稱賛したるなり、

右第二十五章

故至誠無息。不息則久。久則徵。

此れ亦誠を稱賛したるなり、如何に思ひ込みても中道にして廢するは誠に非ず、

爲すとか爲さぬとか確定して動かすべからざるが誠なり、故に至誠なるものは間斷なし、而して事は同じ方針に向はざれば成らず、既に息むと無ければ、其の事久しく續く、久しく續けば必ず効驗の顯はるゝものあり、

徵則悠遠。悠遠博厚。博厚則高明。

此れ前の徵あるとを形容せるなり、既に外に驗あれば則ち悠裕永遠なり、既に悠遠なれば則ち廣博深厚なり、既に博厚なれば則ち高峻光明なり、こゝに博厚高明などいふ詞を用ゐて形容せるは、後に天地を言はん爲めの用意なり、

博厚所以載物也。高明所以覆物也。悠久所以成物也。

こゝの博厚と高明とは地と天との意を加へたるなり、夫の博厚なる地は萬物を載する所以なり、高明なる天は萬物を覆ふ所以なり、悠久即ち悠遠は萬物を成す所以なり、

博厚配地。高明配天。悠久無疆。

夫れ地の職は載するに在り、至誠の博厚は直ちに地に配す、天の職は覆ふにあり、至誠の高明は直ちに天に配す、天地生成、古に亘り今に亘りて疆りなく、至誠外に

徴はれ萬世に傳はりて亦疆りなし、
如此者不見而章、不動而變、無爲而成。

此くの如く至誠息む無き徳を備へたる者は、物自ら其の徳に感化せらるゝを以て見はさざるも而も明かに、他人を動かさんとせずして而も變じ、爲すと無く自然にして成る、以上は至誠無息を敷衍していへるなり、

天地之道可一言而盡也、其爲物不貳則其生物不測。

不貳の下に又不貳の二字を加へて、其爲物不貳、不貳則其生物不測として見るべし、意味更に明かなり、不貳は一なり、即ち誠なり、天道の萬物を化し、地道の物を育するは實に廣大無邊なれども、一言にして之を盡すべし、謂ふ所の一言にて盡す可き者とは、一にして貳ならざる至誠是れなり、天地の道貳ならずして固く之れを執り終始變ぜざれば其の物を生ずると測り知るべからざるなり、

天地之道博也、厚也、高也、明也、悠也、久也。

地の道より言へば、地は物を載せて其の博を極め、又其の厚を極む、天の道より言へば、天は物を覆ひて其の高を極め、又其の明を極む、天地の道は其の悠を極め、又

中
収め也
卷り美也

其の久を極む、かく誠一にして貳ならざる故、下文に云ふが如く、物を生ずるの功用あるなり、

今夫天斯昭昭之多、及其無窮也、日月星辰繫焉、萬物覆焉。今夫地一撮土之多、及其廣厚、載華嶽而不重、振河海而不洩、萬物載焉。今夫山一卷石之多、及其廣大、艸木生之、禽獸居之、寶藏興焉。今夫水一勺之多、及其不測、黿鼉蛟龍魚鼈生焉、貨財殖焉。

昭々は猶歌々といはんが如く、小明なるを謂ふ、辰も星なり、一撮土は一手の指に取るほどの僅少なる地なり、華嶽は大山なり、振は収なり、卷は拳と通ず、拳ほどの小き石を一巻石といふ、黿鼉、一は鼈に似て大なるもの、一は蜥蜴に似て首尾皆鱗甲あり、皮堅厚なるものなりとぞ、蛟は龍の屬にして角無きものなり、今夫の光りかゝやける天を觀るに、斯れ昭々の多く積み重なりたるに外ならざるも、其の誠一を持って萬古變ぜざるを以て、日月星辰繫からざる無く、萬物其の下に覆はる、今夫の地を觀るに一撮土の多きに過ぎず、然れど其の積みて廣厚なるに至びては、華嶽の如き重きものを承け載せて重しとせず、河海を收めて洩らさず、萬物其の

中

内に載せらる、是れ地の誠一なるが故なり、今夫の山を觀るに一拳石の多きなり、而も其の石を積み重ねて止まざる結果は甚だ廣大なるものとなりて、草木之れに生じ、禽獸之れに居り、鑛物こゝに生じて、凡そ世間の服飾器用とすべき者皆此に興る、實に自然の寶藏なり、今夫の水を觀るに、一掬の水の多きなり、而も其の集まりて測られざるに及びては、鼉鼉蛟龍魚鼈の類皆其の中に生じ、聚まりて貨財増殖す、山水の物を生ずると此くの如く盛なるも、亦其の誠一なるを以てなり、詩云維天之命於穆不已。蓋曰天之所以爲天也。於乎不顯文王之德之純。蓋曰文王之所以爲文也。純亦不已。

穆
不已

庸

詩は周頌維天之命の篇なり、於は歎辭にしてあゝと訓ず、穆は尊嚴なる貌、於乎は嗚呼なり、純は維ならざるなり、維天之命は文王を祭れる詩なり、此に引きて至誠無息を證す、所謂斷章取義なり、詩に云ふ、天の命即ち天道は穆として何時までも變らずと、是れ蓋天の天たる所以を贊して曰へるなり、又同じ詩の辭に、嗚呼文王之德は純にして貳せず、其の德豈外に顯發せざらんやとあり、是れ蓋文王の文王たる以所を贊していへるなり、純は亦已まらず變らざるをいふ、純亦不已は詩の純

字を注釋したるなり、

右第二十六章

大哉聖人之道。洋洋乎發育萬物、峻極于天。優優大哉。禮儀三百、威儀三千。待其人而後行。

中

庸

前章は誠といふとを丁寧反覆して説き終へしが、此れよりは聖人の道といふや、や手近きものを言ふなり、前を天道とすれば、これは人道といふべし、洋洋は流動充滿の意にして、廣きとや大なるとに用ふる形容の辭なり、峻は高なり、優々は充餘あるの意、禮儀三百、威儀三千は、經禮三百、曲禮三千とも云へり、經禮は大綱にして、曲禮は小目なり、左傳には是れ儀なり、禮に非すと、劃然禮儀の二者を區別したれど、如何なる場合にても此の差別を立てんとするは妥當ならず、こゝの禮儀は惟禮といふ意なり、優々大哉云々の一節は、萬物を發育する内の人事に係はるとをいへるなり、言ふは、聖人の道は大なるかな、洋洋乎として萬物を生々發育し、上下四方至らぬ限無く、至高至大にして天に極まる、其の萬物を發育する内の人に繋るものを言へば、禮儀三百、威儀三千、以て人々相和睦す、優々として大なるか

凝り聚る故也

故曰苟不至德、至道不凝焉。

な、然れど道は死物なり、之れを運用する明王聖人ありて後、始めて行はるゝなり、至徳は上に所謂其人をいふ、凝は聚なり、成なり、人と道との關係は上に云へる如し、故に曰ふ、苟も其の人至徳の者に非ざれば、至道成就せずと、

故君子尊德性而道問學、致廣大而盡精微、極高明而道中庸、溫故而知新、敦厚以崇禮。

徳性は即ち道德なり、性字を加へたるは性善説より爲せるなり、道は由るなり、故に君子は道德を尊ひ、問學に由る、徳は其の廣大を極め、學は其の精微を盡す、思慮は其の極たる高尚にして明かなる所を極むるも、之れを實行せんとすれば勢ひ弊を生ずるを以て、中庸に由りて行ふなり、故きを研究して未來の處置を考察し、人に對しては、厚きが上にも猶手厚くし、以て禮を崇ぶなり、

是故居上不驕、爲下不倨、國有道其言足、以興、國無道其默足、以容、詩曰、既明且哲、以保其身、其此之謂與。

倍は背くなり、興は興起して位に在るを謂ふ、詩は大雅烝民の篇なり、言ふは、君子

中

庸

は中庸に由り、學問を勉め、禮儀を以て人と交はるが故に、上位に在れば驕矜の心無く、下と爲りては上に背きて之れを譏る如きと無し、國に道行はるときは、君子の言は以て身を興し、位に在りて政を爲すに足る、國に道行はれざるときは、收斂退默して事無く一生を終ふるとを得、詩に曰はく、既に明にして且つ哲なり、以て其の身を保んずとは、其れ此れを謂ふか、明哲は皆事理に明察なるをいふ、總て論語左傳等の古書を讀めば、一方の道德と一方の行爲とが矛盾するとあり、例へば論語に危邦には入らず、亂邦には處らずと曰ひ、左傳に衛の泄冶を評して、自ら死を招けるなりと爲せる如きは、國を愛ひ世を救ふの言と相容れず、或は此の相容れざる者を調和せんとする説もあれど、予の考ふる所にては、古代には萬已むを得ざる場合には、禍を免れて身を全うするに如かずといふ道德説ありしならんか、後世に至りては種々の弊害も生じられたれど、論語に邦無道、免於刑戮と曰ひ、邦有道則知、邦無道則愚、其知可及也、其愚不可及也と曰へるは、此の道德説より出でしものなるべし、

右第二十七章

子曰愚而好自用賤而好自專生乎今之世反古之道如此者裁及其身者也。

中

此れより以下は禮樂を制作するに就きての言多し、裁は災の古字なり、孔子曰はく、凡そ人愚なれば當さに己れを守り、多く聞きて過ち無からんとを心掛くべきに、愚にして自ら其の計を用る、賤者は當さに命を奉ずべきに、位無くして自ら専らにするを好み、今の世に生れては當今の法度に遵ふべきに、古の道に復して之れを今の世に行はんとす、此の三者は災患其の身に及ぶものなりと、
非天子不議禮不制度不考文。

庸

此れより禮樂を制作すべき人をいふ、其の人材則ち最も顯貴にして且つ今の世に合ふとを期する者ならざる可からず、度は法度、文は文字なり、言ふは、以上述ぶるが如くなれば、天子に非ざれば禮を制し樂を作らず、諸々の法度を制定せず、又文字を考へ定むると能はず、文字を考へ作るといは、當時文字の制作無かりし如く聞こゆれど、然らず、支那太古の時代はいざ知らず、春秋時代孔子の頃までは字形全く一致せず、地方によりて相異なる文字を使用せしなり、故に此の言ある

なり、

今天下車同軌書同文行同倫。

中

今とは中庸の作者自ら當時を謂ふなり、軌は轍の地に印したる迹なり、周の制にては輿の廣き六尺六寸、故に其の轍跡の地に在るもの相距る廣狭一の如し、左傳に同軌盡至るとあるは、周の正朔を奉ずる國々の盡く至るをいへるなり、書には文字の點畫形象を同じうし、行は親を尊び、兄を敬ふ等、次序の倫を同じうす、天下の一統せると此くの如し、

雖有其位苟無其德不敢作禮樂焉。雖有其德苟無其位亦不敢作禮樂焉。

庸

更に詳説すれば、禮樂を作るべき天子の位有りと雖ども、苟も聖德無ければ、敢て禮樂を作らず、故に雖は禮樂を作りしと無し、又聖德ありと雖も、苟も天子の位なければ、亦敢て禮樂を作らず、是の故に大聖孔子の如きも未だ嘗て禮樂を作りしとあらざるなり、

礼樂を作らざるは、位に非ざるなり、

子曰吾說夏禮杞不足徵也。吾學殷禮有宋存焉。吾學周禮今用之。吾

教禮也

杞は夏の後なり、湯、桀を放き、少康の後を杞に封ず、是れを東樓公と爲す、武王商に克ち、禹の後を求めて東樓公の後封を杞に得たり、微は證なり、宋は殷の後なり、武王微子を商丘の墟に封じ、湯の祀を奉ぜしむ、孔子曰はく、吾れ夏の禮を人に説けども、そは什が一にも如かざらん、尙詳かに之れを究めんとするに、夏の後なる杞の國にも其の證とすべき者無し、吾れ又殷の禮を學ぶ、殷の後を宋と爲す、僅に存する者ありと雖も、而も明かならず、吾れ又周の禮を學ぶ、惟此の周の禮は文武の制作せし所に於て、今に至るまで天下皆之れを用ふ、故に吾れは周に従ふと、此れ孔子の聖徳あるも亦其の位無ければ、則ち敢て作らざるなり、論語八佾篇に子曰、夏禮吾能言之、杞不足徵也、殷禮吾能言之、宋不足徵也、文獻不足故也、足則吾能徵之矣と、又曰はく、周監於二代、郁々乎文哉、吾從周と。

右第二十八章

王天下有三重焉、其寡過矣乎。

重は大切に取扱ふとを謂ふ、三重とは禮を議し、度を制し、文を考ふるを謂ふ、天下

王天下有三重焉、其寡過矣乎。
王天下有三重焉、其寡過矣乎。

に王たる者、禮を議し、度を制し、文を考ふるの三件あり、皆極めて重大の事、之れを以て天下の視聽を新たにし、天下の心志を一にすれば、政教風俗亦一にして、天下の人其れ過寡きことを得ん、

上焉者雖善無徵、無徵不信、不信民弗從。下焉者雖善不尊、不尊不信、不信民弗從。

上焉者は古昔のもの、下焉者は近來のものなり、禮樂は時代によりて相異なるものなれば、今日之れを制定せんには何れの時代を取りて標準と爲すべきかといふに、上なる極めて古きものは、假令其の制作善しと雖も、世遠くして徵考すべき無し、其の實際に行ひし成蹟の徵す可きもの無ければ、信ならず、信ならずれば人民從はず、然りとて又餘り近代のものは、假令其の制定善しと雖も、尊からず、尊からざれば亦信ならず、信ならずれば亦人民從はず、此の故に孔子は遠きに過ぎず、近きに過ぎざる堯舜を以て其の標準と爲せるなり、若し老莊の理想等の上より言へば、時代の先後を顧みるの要無し、况んや堯舜を云々するを要すべけんや、然れど老莊の理想は理想として研究してこそ價值あるなれ、直ちに之れを世事に施

し、現實に顯はさんとすれば、社會の秩序を亂り、禮制を廢する等、種々の危險起り來るべし、故に孔子は嘗て一度實驗せられて利害の判然たるものを取りて政を行ふを以て主義とせしなり、

故君子之道、本諸身、徵諸庶民、考諸三王、而不繆、建諸天地、而不悖、質諸鬼神、而無疑、百世以俟、聖人而不惑。

是の故に君子は諸れを我が身に本づけて其の可なることを確め、さて後諸れを庶民に徵して是非を定む、かくして可ならば、又諸れを夏段周三代の王に考へ、而して繆ること無くんば、諸れを天地の間に立つ、而して其の大道に悖らざんば、諸れを鬼神に質し、而して疑はしき所無く、百世の後聖人興るあるも、吾が意見に反對することは無かる可しといふ確信ありて後、始めて禮樂を制作す、是れ君子の道なり、此にいへる天地は世の中と云へると同じ、

質諸鬼神、而無疑、知天也。百世以俟、聖人而不惑、知人也。

上の質諸鬼神といふとは、實際には到底行ひ得べきとにあらざれば、此に之れを説明したるなり、諸れを鬼神に質して疑無きは天理を知れるなり、百世の後、聖人

微、證、リ、ト、中
也、
不、惑、合、ノ、事、

を俟ちて惑はず、所謂先聖後聖其揆一なるは人を知れるなり、

是故君子動而世爲天下道、行而世爲天下法、言而世爲天下則、遠之則有望、近之則不厭。

動は言と行とを兼ねて言ひ、道は法と則とを兼ねていふ、法は法度なり、則は準則なり、是の故に天人に通じて能く理を知れる君子は其の言行共に世、天下共に由る所の道となる、(此の一句は綱にして、以下は目なり)其の行ふ所は世、天下の法度と爲り、之れを守らざる者無く、其の言ふ所は世、天下の準則と爲りて、之れに違はざる者無し、四海の遠きも、其の徳の被を悦び望みて企慕の意あり、畿内の近きは其の行の常に習ひて厭敷の心無し、世の字意味強し、輕々に看過すべからず、

詩曰、在彼無惡、在此無射、庶幾夙夜、以永終譽、君子未有不如、此而蚤有譽於天下者也。

詩は周頌振鷺の篇、此の詩は二王の後、來つて祭を助くる詩なり、彼は遠きをいひ、此は近きをいふ、射は厭なり、夙夜は夙は早、夜は暮にして、精勵拮据するを謂ふ、如此とは上の本諸身以下の六事を言ふ、詩に曰はく、彼に在りても憎嫌せらるゝと

蚤、レ、見、フ、也、
庸

無く、此に在りても厭敷せらるゝと無し、庶幾くは夙夜精勵し、以て永く譽を終へ
全うせんと、君子上に所謂本諸身、徵諸庶民、考諸三王而不謬云々の如き非常なる
注意と精勵と確信とあらざして、蚤く天下に譽有る者は古今一人もあらざるな
り

右第二十九章

仲尼、祖述堯舜、憲章文武、上律天時、下襲水土。

前章に君子之道本諸身云々といへる如く、事柄の上に於ても過無く心に確信す
る所有るべしといふに關して孔子の事を此に引きたるなり、祖は始なり、述は傳
なり、例へば堯舜がかく言ひたり、かく行ひたり、故にかく言ふべし、かく行ふべし
といふの類なり、憲は遵奉すること、章は表揚することなり、律は法るなり、襲は因
るなり、仲尼は堯舜の言を祖述し、文武の行を手本として遵奉し、決して自己の理
想を以て事を爲さず、蓋前にも云ひし如く、己れの理想若しくは空想を以て直ち
に現實に顯はさんとせば、果して廣く恩澤を施き及ぼすことを得べきや如何、疑
はしといふべし、故に仲尼は惟祖述し、憲章するのみ、論語に述而不作とあるも亦

此の意なり、又上は天の時に法り、氣候の寒煖等により、下は土地の高低肥瘠等水
土の摸様に因りて政治を爲し、決して千篇一律に流れず、禹の裸國に祖せし如き
も亦時と處とに因るなり、

辟如天地之無不持載、無不覆幬、辟如四時之錯行、如日月之代明。

辟は譬なり、幬は覆なり、錯は迭のごとし、孔子の考は譬へば天と地と互に持ち合
ひて一物として載せざる無く、天の万物を覆幬して餘す所無きが如く、又四時の
迭ひに行はれて、春夏秋冬の次序を亂さざるが如く、日月の晝夜更るゝ明かな
るが如く、あらゆる万物を生成するなり、

萬物並育而不相害、道並行而不相悖。小德、川流、大德、敦化。此天地之
所以爲大也。

天は覆はざる無く、地は載せざる無く、萬物其の間に並び育せられて、互に相侵害
せず、道其の中に並び行はれて相違悖せず、小徳は河水の日夜流れて息まざる如
く、大徳は其の化を敦厚にして窮りなし、以上の二節は天地の大を言ひ、以て仲尼
の徳を形容したるなり、

右第三十章

唯天下至聖爲能聰明睿知足以有臨也。寬裕溫柔足以有容也。發強剛毅足以有執也。齊莊中正足以有敬也。文理密察足以有別也。

中庸 本章は人道を言へるなり、唯はたいこればかりといふ義、臨は上に居て下に臨むを謂ふ、寛は恢弘にして狹隘ならず、裕は舒緩にして急迫ならず、温は和厚にして慘刻ならず、柔は慈順にして乖戾ならざるを謂ふ、發は奮發、強は立つあると、剛は立つ所撓まざると、毅は息まざるの意、皆意志の強健なるを種々に言ひかへたるに過ぎず、執は守るなり、齊は慎むなり、莊は端嚴なるなり、文は文章にて、世の仕組をいふ、理は條理なり、言ふは、唯獨天下の至聖のみ能く聰明にして聞見せざる無く、睿知にして通知せざる無く、以て萬民の上に臨みて政を爲すに足り、寬裕溫柔にして以て人の言を容れ、物と相争はず、之れに加ふるに發強剛毅以て固く執り守る所あり、齊謹莊端中正にして偏倚無く、以て他人より敬せられ、世の文章即ち社會の組立に詳密にして、條理を審察し、以て善惡正邪を識別するに足るとなり、
溥博淵泉而時出之。

庸

中

中

庸

溥博は周徧にして廣濶なるなり、淵泉は靜深にして本有るを謂ふ、以上五つの徳を備へたる者は、其の思想周遍廣濶にして又靜深沈着なり、而して時に模様を視て、上に所謂寬裕溫柔、發強剛毅、齊莊中正、文理密察を以て、事に應じ、宜しきに處するなり、

溥博如天、淵泉如淵、見而民莫不敬、言而民莫不信、行而民莫不說。

更に之れを形容すれば、溥博なるは天の如く、淵泉なるは地の如し、時に之れを出せば民欽敬せざる無く、言へば民尊信せざる莫く、行へば民悅服せざる莫し、是以聲名洋溢乎中國、施及蠻貊、舟車所至、人力所通、天之所覆、地之所載、日月所照、霜露所墜、凡有血氣者、莫不尊親、故曰配天。

洋溢は充ち滿つるなり、中國は本國といふに同じ、蠻は南方の國、貊は北方の國、俱に未開の國なり、隊は墜なり、上に云へるが如くなるを以て、聲聞名譽國中に充滿し、尙ほ施き傳へて南蠻北貊に及ぼし、舟や車の至り達する所、人の力の通ずる所、天の覆ふ所、地の載する所、日月の照す所、霜露の墜つる所、凡そ血氣ある者、之れを尊び親まずといふと莫し、故に前に在ることく天に配すといふに至るなり、

右第三十一章

唯天下至誠爲能經綸天下之大經、立天下之大本、知天地之化育、夫焉有所倚。

中

前にも至誠の人を言へるが、此にも亦申ねて之を言へるなり、經綸は絲を治むるとにて、經は其の緒を理めて分つをいひ、綸は絲をより合はすを謂ふ、故に經綸とは治むるとにて、大學に所謂治國平天下なり、唯獨り天下の至誠なる者、能く天下の大經を經綸し、天下の大本を立て、天地が萬物を化育するの理を知るを得、之れに法るものなれば、其の行ふ所必ず中庸を得ん、焉んぞ偏倚する所あらんや。

肫肫其仁淵淵其淵浩浩其天。

肫肫其淵

庸

肫々は懇至の貌、淵々は靜深の貌、浩浩は廣大の貌なり、言ふは至誠の人、人は人に接するに懇切にして仁、其の考は淵々として淵の如く廣く、心の廣大なることは浩浩として天の如し。

苟不固聰明聖知達天德者其孰能知之。

此れは前節に唯天下の至誠能く天地の化育を知るといへるを反説したるなり。

中

固は猶ほ實にといはんがごとし、知之は鄭氏は知聖人と解きたれど、天地の化育を知ると見る方可なり、朱子も亦かく解せしものゝ如し、言ふは、苟も實に聰明聖知にして天の德に達せし人にあらずば、其れ孰れか天地の化育を知ることを得んやとなり、不は非と同じ。

右三十二章

詩曰衣錦尙絢惡其文之著也。故君子之道闇然而日章。小人之道的然而日亡。君子之道淡而不厭、簡而文、溫而理、知遠之近、知風之自、知微之顯、可與入德矣。

尚、加之也
化、遠之也、
近、近之也

庸

此れ以下は殆んど詩を引けるのみにて、中庸としては附録の如き觀あり、詩は逸詩ならん、朱子は國風衛の碩人の篇及び鄭の丰に衣錦褻衣とあるを以て、本文の詩は此の二篇を言へるなりと爲せども、予は全く異なる詩にして、今は逸して傳はらざるものなるべしと考ふ、今日の詩の完全なる者に非ざること、人は人の能く知る所にして、論語に巧笑倩兮、美目盼兮、素以爲絢とあるも、今日この通りの詩あるにあらず、故に今の詩を以て尙絢を褻衣となすは非なり、尙は加ふるなり、絢

中

中庸の字を以てし
は意を以てし

は單の衣なり、誠といふ徳は動かずして變じ爲す無くして成る、故に君子は其の
 獨を慎むともありて、誠ある人は外形を務めずして心を治む、此の義を證明せん
 ため、此に詩を引きたるなり、然るは外に現はれて耀く貌、温は曖昧なる貌、遠之近
 は朱註に見於彼者由於此也とあり、彼とは他人をいひ、此とは己れの身をいふ、風
 は風采なり、様子なり、風之自とは、外に著はるゝものは内に本づくをいふ、詩に曰
 はく、錦衣をきて其の上に紉を加ふと、是れ錦の文模様が燦爛として外に著はる
 ゝを思ひてなり、君子の道も亦此の詩の如く、敢て外觀の美を務めずして、内を治
 ゝむるを専らとす、故に闇然として知られんとを求めざれども、而も日に章かにし
 て有徳者なりと知らる、小人の道は之れに反して外に暴はれて光り輝けども、實
 以て之れに繼ぐもの無ければ日に亡ぶ、君子の道は淡泊にして厭はしからず、簡
 單なれども而も文章あり、曖昧なるが如くなれども而も能く治まるなり、彼れに
 著はれて人の我れを毀譽するは皆自己の身より起るものなるを知り、我が身の
 容姿は言語形貌より出づるにあらず、心中より自つて來るなり、故に其の様子を
 温厚にせんとか、高尚にせんとか思はゞ、先づ其の本づく所の心よりして温厚高

庸

中

庸

詩云、**潛雖伏矣、亦孔之昭、故君子内省不疚、無惡於志、君子之所不可
 及者、其唯人之所不見乎。**

詩は小雅正月の篇、疚は病なり、無惡於志とは猶ほ心に愧づると無しと言はんが
 ごとし、詩に云ふ、内に潜みて隱伏すと雖も亦甚だ昭明なりと、故に君子は内に省
 みて一毫の疚しきと無く、心に愧ぢて我れと我が志に惡むと無し、凡そ人の君子
 に及ぶ可からざる所の者は、只是れ人の見ざる所に於て獨を慎むにあり、此れは
 上文を承けて、隱なるより見なるは無く、微なるより顯なるは無きを言ふなり、
 詩云、**相在爾室、尚不愧于屋漏、故君子不動而敬、不言而信。**
 詩は大雅抑の篇、相は視るなり、屋漏は朱註に室西北隅也とあり、室の中にも最も
 尊き所なれば、猥りに入ること無きを以て、人の居らぬ所の義とせり、又一説には
 屋根の漏ること、解く説もあり、屋の漏るゝは外面よりは見えざれど、内に入れ

ばよく見ゆるものなり、人の心の内も亦此の如しとの意より言へるなりと、此の説は解し易けれども、熟語としては多く朱註の意に用ゐれば、予は朱子の説に従ふ、詩に云ふ、爾の室に在るを視るに、庶幾くは屋漏の人無き所にも愧ぢざれど、故に君子は動かさずして人之を敬し、言はずして而して人之を信するなり、

の詩曰、**奏假無言、時靡有争、是故君子不賞而民勸、不怒而民威於鈇鉞。**

詩は商頌烈祖の篇、奏は進なり、假は感む格すなり、威は畏るゝなり、鈇は草を斬る刀、鉞は斧なり、詩に曰はく、祭を主とる者が神前に進み近づきて神に交はる時は、嘿して一言をも發せず、言はずと雖も衆人の心に神を尊び敬ふの念あるを以て争ふと無し、此の祭の時の如く誠を以てすれば、君子賞せずして民勤勞し、怒らずして民鈇鉞より畏る、此れは誠の人を動かす效あるを言へるなり、

の詩曰、**不顯惟德、百辟其刑之、是故君子篤恭而天下平。**

詩は周頌烈文の篇なり、不顯は顯はれざると訓ずべし、詩に曰はく、君子の有せる不顯の徳は百官之れに法ると、是の故に君子心を篤實にし、行を恭敬にすれば、翕然として之れに法りて天下平かなり、此れ亦誠の徳をいへるなり、

不顯、徳ヲ言フ
毛、猶有倫、上天之載、無聲無臭、至矣。

の詩云、**予懷明德、不大聲、以色。子曰、聲色之於以化民、末也。詩云、德輶如毛、毛猶有倫、上天之載、無聲無臭、至矣。**

徳、輶、如、毛、猶、有、倫、上、天、之、載、無、聲、無、臭、至、矣。

大雅皇矣の詩に云ふ、予れ明德を懷ひ、其の聲音と顔色とを張大にし以て民を感したり導きたりすると無しと、孔子曰はく、此の詩の云ふ如く人君の聲色が民を化するに於けるや、抑、亦未なり、是非とも明德を以てせざる可からずと、又大雅烝民の篇に徳の輕きと毛の如しと云へり、輶は輕なり、倫は猶ほ比のごとし、此の詩以て徳を形容するに庶しと雖も、未だ其の妙を盡さず、蓋、毛は猶倫類ありて、最も細微の極なる者とは謂ふ可からず、詩の大雅文王の篇に上天の萬物を化育するの力は廣大無邊にして、聲も無く臭も無く、窺ひ知る可からずと云へり、實にも天何をか言はん、四時行はれ、百物生ず、徳は上天の如く聲も無く臭も無し、而して其の妙用窮り無し、至れるかな、此れ誠を形容せるものにて、謂ふ所の徳は即ち誠なり、

右第三十三章。子思因前章極致之言、反求其本、復自下學爲己謹獨之事、推而言之、以馴致乎篤恭而天下平之盛、又贊其妙、至於無聲無臭而後已焉。蓋舉一篇之要而

中

庸

約言^{シテ}之^ヲ其反復丁寧示^ス人之意至深切^{ナリ}矣。學者其可不盡^ル

(九二)

心乎。

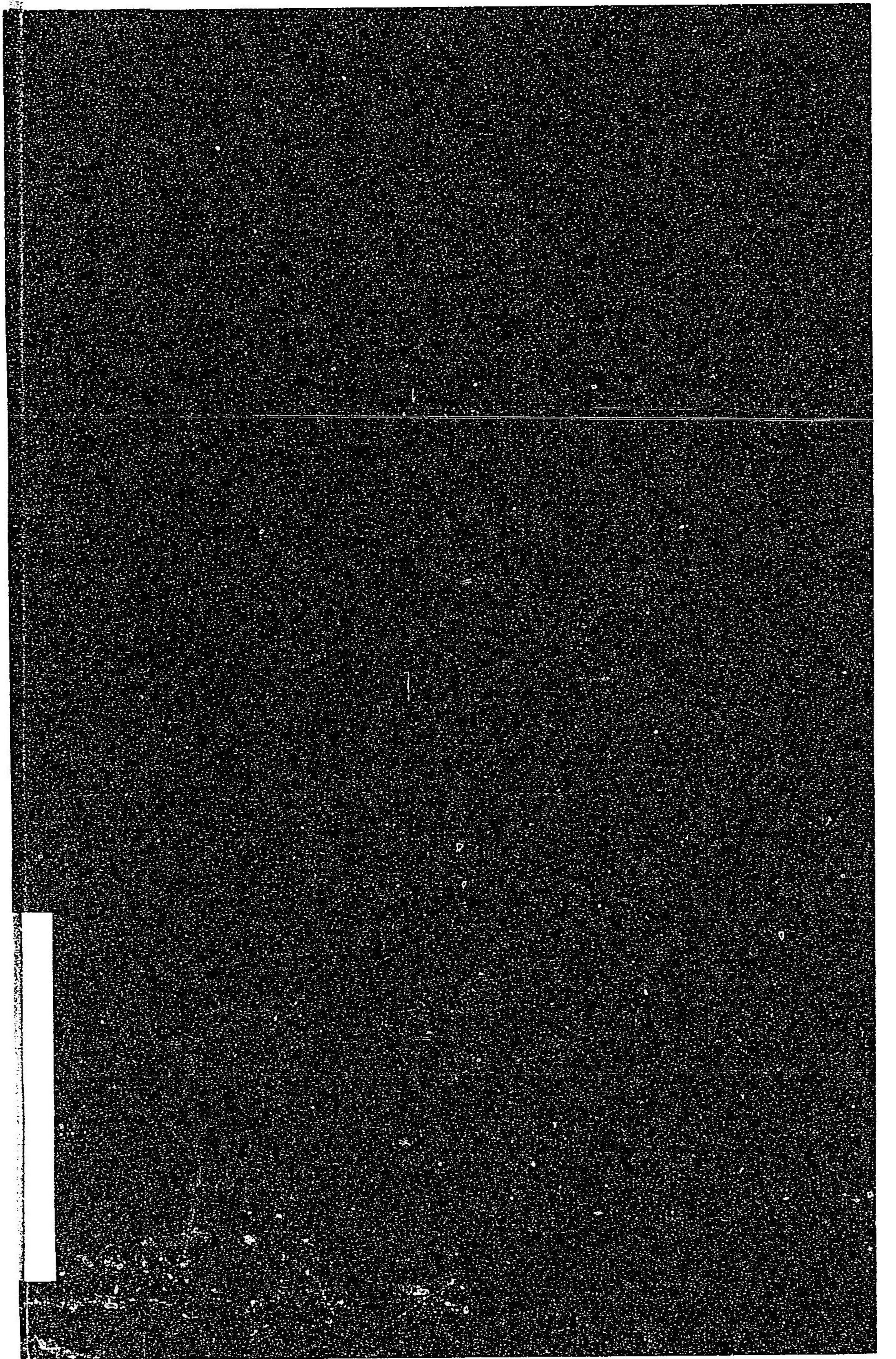
中庸の大意を略述すれば、天命之謂性より始めて、人は天の命を享けて生れたる者にて、天より享け得し性と、性に本づきて作られたる道とは互に相離る可からず、是非とも人は此の道に率ひ由らざるを得ず、道とは何ぞや、中庸是れなり、中庸を行へば、以て身を修め家を齊へ、國を治め天下を平かにするを得、而して中庸の道は或は郷原と類すれ共、誠實上より得來る行は眞の中庸なれば、特に慎獨及び誠を説きたるなり、

大學、中庸は心を修むるを主とす、後世心學を修むる者の據る所は學庸の二書なり、諸子心を潜めて學びなば得るところ決して勘からざらん、

中 庸 終

IS 74

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a set of initials, located in the center of the page. The text is faint and difficult to decipher due to the high contrast and grainy texture of the scan.



14

223

008608-000-9

14-223

中庸

安井 小太郎/述

出版年不明

AAC-1475



14

22

エ S 74

哲學館
哲學部
講義

中庸

安井小太郎



藏